
サムライ・アタック

ダイナマイトドラゴン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サムライ・アタック

【Nコード】

N6666X

【作者名】

ダイナマイトドラゴン

【あらすじ】

魔法が効かない統率された魔物達に襲撃され、サラティア王国は滅びの危機に瀕していた。王女ターニヤは事態打開の為、「魔神召喚」を行う。しかし、現れたのは魔神ではなくただの人間だった。サラティアの運命やいかに!? 自称「サムライ」日本の男子高校生吉岡法男が異世界で大暴れ！俺達の戦いはこれからだ！！

第一話 フロム・ジャパン

「魔神召喚は可能でしょう」

この部屋の管理人をしているエルフのミレーニユはそう言った。魔神召喚。この国に伝わる秘術。約四〇〇年前、一度だけ成功したという。以来、一度も試みられなかったその術は方法だけがサラティア王家に伝えられている。

「しかし、非常に危険です」

召喚した魔神とは契約を結ばなければならない。魔神が何を代償に求めるのかは分からないし、魔神が気に入らなければそのまま殺されてしまうかもしれない。

「私としてはやはり思いとどまって頂いた方が……」

ミレーニユはそう言うてくれたが、サラティア王国の王女であり最大の魔力を持つターニヤは既に覚悟を決めていた。

意を決して扉を開ける。

初めて入るその部屋は薄暗く、部屋の向こう側はぼやけて見える程の広さだった。天井もかなり高い。壁の片側、かなり高い所に小さな明かりとりの窓があった。

そのか細い光を頼りに中央に進む。

床にこれまた巨大な魔方陣が青く浮かび上がっていた。

ターニヤはその前で跪き、胸の前で手を組む。目をつむり、心を落ち着かせ、呪文を詠唱し始める。

呪文が進むにつれ、魔方陣の青い光が強くなっていく。部屋の空気が変わる。何か邪悪な濃密な気配が強く感じられた。それが最高潮に達した時、ターニヤは両手のひらを天井に向かって差しあげた。

「サラティアの名の下、出よ、魔神！」

ターニヤが叫ぶと同時に青い光が部屋の中を埋め尽くす。

そして、光が弱まり邪悪な気配も消えた。

そこに、居た。魔方陣の上に。

ターニヤは思わず息を飲み込んでしまう。

そこに現れたものは自分の二倍はあるように感じた。実際にはそこまでではなかったのだが、身長だけでなく広い肩幅や分厚い胸板が大きいという印象をさらに強くさせていたのだ。そして、その巨大な身体を包む服は見た事が無い形をしており、真っ黒であった。中央のボタンだけが金色をしていて不気味に光を放つ。そして、その髪はやはり黒。中央に寄せ、前に突き出しながら後ろに流すという見たことのない異様な髪型は威圧を感じさせられた。

そこまでだったらただの人並み外れた身長を持つ奇抜な服装の人間と変わらないだろう。

だが、その目、その顔つき。眉間に皺が一本、彫りの深いその顔にするどい目つき。その目がターニヤの方を見た。心の芯まで震え上がりそうになる。

「魔神」というものの恐ろしさをターニヤは初めて実感した。

しかし、ここで逃げ出す訳にはいかない。ターニヤは勇気を振り絞った。

「魔神よ！私の望みはこの国の危機を払う事。汝の望みを申されよ。そして、我と契約を！」

ターニヤは決死の覚悟で魔神の返事を待つ。

魔神は口を開かない。そんなターニヤをじいつと見つめる。そして、何も言わないままターニヤから目を離し、ゆっくりと辺りを見回した。その目が再びターニヤに戻ってくると魔神はターニヤの方に歩み寄って来た。

ターニヤは後ずさりしたいのを必死に我慢して魔神を見つめる。

魔神はターニヤの目の前まで来ると足を止めた。

「もう少し詳しい話を聞かせてもらおう」

魔神の声は意外と若々しかった。その声にターニヤの緊張は少し解きほぐされ、これまでのいきさつを語り出した。

サラティア王国は山間の小さな国である。魔法が盛んで、そのおかげで大国にも引けを取らない程の力を持っている。城下街は城壁に囲まれ外敵を寄せ付けない。時に魔物も現れたりする事もあったが強力な魔法を持つサラティア軍に簡単に撃退されていた。国は永らく平和であった。

しかし、それが一変してしまったのだ。

二週間程前、ゴブリンを中心とする魔物の群れが街を攻撃し始めた。その魔物達には魔法が一切効かなかった。戦いは常に劣勢となった。そして魔物達の攻撃はついに城壁を突破するところまで迫っていた。

「そして、自分達の力ではどうしようもなくなったお前達はこので『魔神』を召喚しようとしたって訳か」

その言葉に違和感を抱きながらターニヤは頷いた。

「お願いです！私達に力を貸して下さい！」

「いいだろう」

魔神はあっさりと言った。

ターニヤはほっとするが同時に「契約」の事を思い出し気を引き締める。

「それでは、契約を……。あなたの望みを聞かせて下さい……」

またしても魔神はすぐには口を開かない。自分の胸より低い所にあるターニヤの目をじっと見つめる。

ターニヤにとって魔神が口を開くまでの間は死刑宣告を待つ時間であった。

「悪いが契約は出来ない」

「え？」

ターニヤには予期せぬ言葉が聞こえた。

「俺は魔神なんてものじゃなく、ただの人間だからな」

「……？」

聞こえた言葉が上手く頭の中に入ってこない。

私は確かに「魔神召喚」の儀式を行い、成功させた。だからこの男がここにいるのではないか。しかも、この男は姿こそ人間と似てはいるが私達とはどこかしら異質だ。その異質さが「魔神」という存在なのだと思っていた。しかも、………しかも私の願いにうなずいてくれた……。

扉が開いた。

ターニヤの思考は中断され、そちらを見る。男も同じく入り口の扉を見つめる。

開いた扉から女の姿が現れた。

人間にしては華奢過ぎるそのプロポーション。ふわりとさらさらな金色の髪。こちらをうかがうその目は透き通った美しい青色。耳は細く尖っていた。そして貧乳だった。ストンとかペタンとかの擬音がとてもよく似合う彼女は「森の妖精」と称されるエルフであった。彼女は総じて美しいとされているエルフ族の中でも飛び抜けて美しいだろう、見る者の魂を吸い付ける容姿であった。

彼女 ミレーニユは男の姿を見とめると体をこわばらせたが無事な王女の姿を見てほうつと息を吐いた。

そして姿勢を正す。

「報告します！外の者より遠話が入りました。敵に正門を突破された、と」

まず、男が動いた。

「案内しろ」

そう言いながらも王女を置いて早足で扉へ向かう。ターニヤは追いつき追い越す為には駆けねばならなかった。

ミレーニユは扉を大きく開き道を空ける。

男はそんなエルフを一顧だにせず扉を抜ける。ターニヤは複雑な表情を見せながら小さく会釈しながら駆け抜けていく。

「せつ……」

成功したのですか？そんな言葉を掛ける暇はなかった。ミレーニユは言葉を選び直した。

「ご無事で！」

その言葉にもう一度力強く小さな頷きを見せ、ターニヤは男を追い越す。

「ただの人間なのでしょう？奴らには魔法は効きません。どうやって戦うというのですか？」

駆けながら問いかける。しかし、ターニヤは男の力を疑っている訳でも見くびっている訳でもなかった。既にこの男はこの状況を打開してくれるのだと確信していた。

「この世界にも剣という物があるだろう？」

その物言いにひっかかりを感じながらも疑問に対する答えだけを口にした。

「はい！城門を出た所に用意させておきます！」

ターニヤは遠話をどこかに飛ばしたようだ。男はそんな事に対して疑問をはさむ事無く付いていく。

狭く長い通路。魔方阵の部屋はこの建物、サラティア城の一番奥深い所にあつたのだった。長い距離を駆けした後、ターニヤは最後の扉を開いた。

一人の召使い風の女が剣を持って立っていた。ターニヤはその女

から剣を受け取り男に渡した。

「これをお使い下さい」

男は黙って受け取る。

「あの……、あなたは剣士のですか？」

ターニヤはためらいがちに抱いていた疑問を口にした。この男の持つ雰囲気は気軽にものを尋ねる事を躊躇わせるものだったのだ。

「いや、武士だ」
サムライ

どこか誇らかしげに、もしかすると照れくさそうに男は言った。

城門の前はきれいに石畳で舗装された広い一本道だった。遠くに巨大な門が見える。あれが突破されたという正門なのだろう。ターニヤはそこを目指して駆けていく。

「あそこか？」

「はい！」

ターニヤは駆ける。男はその背中を見つめた。

「場所は分かった」

「はい！」

ターニヤは駆ける。男は少し困ったようにその背中を見つめた。

「もういい。あとは一人で行ける」

「はい？」

ターニヤは振り向かず、駆けながら答えた。

「お前は戻れ」

「いえ！私も行きます！」

「魔法は効かないんじゃないのか？」

男にはこの少女が魔法以外の力を持っているとは思えなかった。

「はい！効きません！」

「じゃあ戻れ。お前は戦えないのだろう？」

「いえ！戦えませんがあなたの盾ぐらいにはなれます！」

既に無いと思っていた命。命を捨てて召喚に挑んだはずであったが現れたのはただの人間だったという。しかし、その、ただの人間は助けてくれるのだという。ならば私は私に出来る事、私がこの国の為に、この男の為に出来る事をやりにいこう。たとえば、それが一太刀を防ぐだけの事であつても。

ターニヤは駆ける。男はその背中を見つめる。

そして、その襟首に手を伸ばした。

「きゃっ！」

軽々とその体を引き寄せ耳に口を近づける。

「ありがとう」

男はそう言った。微笑んでいた。その目は優しくターニヤの目を覗き込んでいた。ターニヤは間近でその顔を見てしまった。胸が鳴った理由は何なのだろう？そう思った瞬間ターニヤの体は大きく後方へ投げられていた。

着地。衝撃を逃がす為にぐるぐると後転する。その動きは俊敏で、なるほど、王女らしからぬ、いちどきりの盾にはなれそうだった。

立ち上がって自分を投げた男を睨みつけようとしたら視界が真っ黒になっていた。焦った時にはもうその服は自分に覆い被さっていた。服からようやく顔を出した時、

「預かっててくれ！」

豆粒みたいな背中がそう言った。

刃と刃がぶつかり合う音。そこには鎧をつけた巨大な獣の集団が剣を振るっていた。

豚のような鼻を持ち邪悪な小さな目、頭には二つの小さな角。体は人間の倍はありそうなその魔物はこの世界では「オーク」と呼ばれる凶悪な魔物であった。

その全てのオークの額には黒く十字架の形に奇怪な紋様があつた。

対する人間は一体に対して数人がかりで。しかしそれでもいつなぎ倒されるか分からない程の劣勢。

男は剣を鞘から抜く。

一番近くにいたオークは向かってくる男に気がつき剣を向けようとした。

が、遅すぎた。

男は間合いに入った瞬間オークの首を胴体から離していた。

崩れおちる巨体。そのオークと戦っていた兵士達は呆然と男を見る。周りのオーク達や兵士達も男に気づいた。オーク達は新たな敵を一番にやつつけてしまわないといけない存在だと認識したようだった。戦っていた兵士達をはね除け、すり抜け、男に殺到する。兵士達は見慣れぬ姿といきなりの状況にどう判断していいかわからない様子だった。

オークの剣が男の頭目がけて振り下ろされる。

紙一重。

ぎりぎり、という意味では無く必要最小限。かわした先では振りかぶっていた。振り下ろす。その一番近くにいたオークが真つ二つになった仲間を認識した時には男はその左、剣を持っていない方に移動していた。

切る。

次々と斬っていく。

兵士達は自分達のすぐそばでオークをなぎ倒していく鎧も着けない、見慣れない服を着た巨漢をぼうつと眺めるしかなかった。

あつと言つ間に立っているオークはいなくなった。

「あ、あの、あなたは……？」

兵士の一人が男に声を掛ける。

「戦いは終わったのか？」

男が返すとその兵士ははつとなった。今の状況を思い返したのだろつ。

「今、私達が戦っていたのはオークという敵の中でも強力な魔物で

す。そいつらに城門を突破されたのですが門の外ではゴブリンという敵の主力が押し寄せています。別の部隊がそれに応戦中です」

男は頷き、駆け出す。

その場にいた兵士達もその背中を追って駆け出した。

ゴブリン達は数だけはい多いものの難敵ではない。十数体のオークを一瞬で撃破した男も加わった事もあって、程なくサラティア軍は敵を壊走させた。

敵の姿が見えなくなるとサラティアの兵士達は見慣れぬ男の方をみる。助けられた事実とその奇妙な服装、巨大な体、凶悪な顔という自分達とは異なっているという意識が行動を迷わせていた。男の方もそんな兵士達の様子を眺めているだけで自分から話し掛けることも歩みよる事もしない。

そんな中、一人の兵士がその男に歩み寄って行った。オーク達の戦いの後、男に話し掛けたあの兵士であった。

「ありがとうございました。あなたのおかげでこの国の危機はひとまずは回避できたようです」

そう言って頭を下げる。男も返礼した。

「私はサラティア軍親衛隊隊長のアトロス。聞きたい事はいろいろありますがまずは城に帰って一休みとしましょう。ご案内いたします」

親衛隊の隊長アトロスは兵士達に厚く信頼されているようだ。アトロスが男に歩み寄った時から周りの兵士達から不安な色が消え、成り行きを見守るようになっていた。

アトロスはそんな周囲をぐるりと見回す。

「皆、この戦いは我々の勝利だ！帰還するぞ！」

おおー、と兵士達は鬨の声をあげた。

男の事は親衛隊長に任せておけば安心だ、とばかりに皆ぞろぞろと城門へと向かう。

「では、こちらへ」

アトロスは男を促し歩き出そうとした。その背中に声が掛かる。

「アトロス隊長」

アトロスは振り向いた。男と目が合った。男は小さな笑みを浮かべていた。

「俺の名前は吉岡法男」

アトロスにも笑みが浮かぶ。

「よろしく、ヨシオカ」

手を差し出した。

差し出された手を握った。

城門で出迎えたのはターニヤともう一人。法男に剣を渡した女性。ターニヤは泣きそうな怒ったような嬉しそうなほつとしたような複雑な顔で黒い服を抱え、法男を睨んでいた。

怒るべきか礼を言うべきか喜ぶべきか毅然とした態度をとるべきか、近づいて来る法男にどんな態度を取ったらいいのか決められない。が、隣の男に気がつき、そちらに声を掛けて結論を先延ばしにする事にした。

「お兄様、ご無事で」

「おう、ターニヤ。敵はこちらのノリオ殿のおかげで撃退出来た。心配させたな」

「え……？ノリオ？」

その言葉にターニヤは戸惑い、法男を見る。

「紹介したいのだが……何と言うか……」

ここまで歩いて来る間、質問者は法男でアトロスは答えていたただけだった。まだ、法男には何も聞いていない。分かっているのは法男がこの国について、いや、この世界について何も知らないという事だけであった。

「あ、あの、この人は……」

ターニヤもまた、何と言っていいやら分からない。

二人は続ける言葉を探す。

法男はそんな二人を黙って見ている。

何とも言い難い雰囲気助け船を出したのはターニヤの横に立っている女性だった。

「この方には来賓用の浴室を使って頂いたらよろしいのでしょうか？」

法男もアトロスも全身返り血にまみれていた。

「あ、ああアラミア。すまないがこちらの、ヨシオカ・ノリオ殿を

浴室に案内してくれないか。ターニヤ、私も体を流してくる。話は後で」

ターニヤは頷いた。その間にどう説明するのか整理しておこう。そうだ、お父様にも報告しておかなければ。そして、この自分が召喚してしまった、自分を投げ飛ばした男に対する気持ちも整理しておこう。

「それでは、ノリオ様、こちらへ」

ノリオは頷き、アラミアの後に続く。ターニヤの方には一瞥もしない。

ターニヤはその背を法男の学生服をぎゅっと抱きしめながら見送った。

浴室は広々としていた。銭湯とまではいかないが旅館の家族風呂ぐらいはあったであろう。

体を洗い、浴槽に浸かると戦いで疲れが取れていくように感じた。

普段よりもかなり長く浸かって堪能した後、湯船を出た。

脱衣場には鏡があった。法男が見慣れていた鏡よりかはつきりとは写らないものではあったが、十分にその役割を果たすものであった。

体を拭き終えた法男はその前に立つ。

「……」
ポマードは、無い。

いつもリーゼントに決められていた長い髪は収まり無く、たれ下がっている。

「……」
髪を両手でかき上げ纏め、後頭部から垂らしてみる。

「……」

ちゃんまげ。

武士と名乗った自分にふさわしいような気がした。
角度を変えつつ自分の姿を確認していく。

悪くない。よし、これでいこう。髪をとめる物があるなと思った
時、扉が開いた。

「ノリオ様、お着替えをお持ちしました。少し小さいかもしれませんが
んがサイズの合うものが用意出来るまでこれで我慢して頂けますか」
アラミアだった。今は目を伏せているが、さっき入ってきた時には
目が合っている。

「……………ありがとう、そこに置いておいてくれ」

手を離し、常人ならば耐えられないような気恥ずかしさを押し隠
して法男は言った。

扉を開けるとアラミアが立っていた。

すでに心を落ち着かせ終わっていた法男は動揺しない。

「それではお部屋にご案内します」

アラミアの言葉に落ち着きはらって頷き、歩き出した背に続く。

「あの、」

アラミアが歩きながら振り向き声を掛けた。

「髪を止めるものをお持ちしましよ」

「いや、いい」

間髪入れないどころかうかに被せて法男は断る。それは法男の心
のうちを顕わにする行為だった。体は巨大だとはいえ、法男は高校
二年生。まだ少年と呼ばれるべき年齢だった。未熟だと誹るのは酷
だろう。

しかし、それはアラミアを動揺させるものだった。

アラミアはすでにターニヤから法男が出現した経緯を聞かされて
いる。そして、帰還した兵士達から法男の鬼の如き戦いぶりも。法

男はこの国にとって救世主となるに違いない存在だとアラミアは認識していた。

そんな大切な人を自分のせいで傷つけてしまったのかもしれない。怒らせてしまったのかもしれない。なんとか法男の機嫌を取らなければ。

歩きながら考える。

しかし、なんとやってよいやら分からない。

とてもよく似合っていましたよ。

すつごく大きかったです！

ムキムキでステキでした！！

思いつくどの言葉にも法男の機嫌を直させるような効果があるとは思えなかった。結局何も声を掛けられないまま部屋についてしまった。

「当面こちらの部屋をお使い下さい」

法男を部屋の中へと案内する。

「来客用の部屋ですので一通り必要なものはすでに揃っているとは思いますが、何か欲しい物があれば私に申し付け下さい」

法男は頷く。その表情には動揺も不機嫌さも現れていない。しかし、アラミアは不安なままだった。出て行くこともせず法男を見つめる。法男も何を言うでもなくアラミアを見る。

「あの、」

「うむ」

アラミアは勇気を出し、口を開いた。

「ノリオ様にもご自分の事情が有りかとは思いますが、ですが今、この国は恐ろしい魔物に襲われ、滅びの危機に瀕しています。ノリオ様のお力が必要なのです！どうか、ご自分の世界にお帰りになる前に、この国にお力をお貸し下さい！」

「……」

法男はその言葉に思いもかけず面食らってしまった。帰る前？
帰る？

どうやって？

今の今まで浮かばなかった事柄だった。

何も言わない法男にアラミアの不安はさらに大きくなり言葉を続ける。

「わ、私に出来る事なら何でもしますから！」

そう言うアラミアは自分の服に手をかけた。少年である法男にもその意味は分かる。法男はアラミアの顔をじっと見つめた。

いや、正確には視線をアラミアの顔に固定しながら意識はその下にあるはだけた胸元に集中していた。期待を込めながら。

アラミアも法男の視線を受け止め、潤んだ瞳で見つめ返す。実は一方通行だったのだが。

やがて、それ以上アラミアは動かないと悟った法男は諦めて口を開く。

「いいだろう」

「え？」

アラミアの目が輝く。

「この国を襲う脅威が去るまでは決して帰らないと約束しよう。俺に大した事ができるとは思えないがな」

「あ、ありがとうございます！」

アラミアは乱れた着衣を直しながら嬉しそうに言う。

「あ、あの、もうしばらくしたら会議がありますのでそれまではここでおくつろぎ下さい！あ、私、お茶をお持ちしますね！」

「ぱたん！ ぱたぱた……」

法男は閉まった扉を見つめながら考える。

帰りたくても帰り方が分からないという事を伝えといた方がいいだろうか？

法男は先ほどの一幕を思い返す。

……いや、やめておこう。

もしかしたら、さっきのような展開がまたあるかもしれない。自分からせまるなんて出来ない少年の法男はそう考えた。

部屋の中には長細いテーブル。一番奥には初めて見る王冠をつけた壮年の男。その両隣にターニヤとアトロス。そして、いかつい男やら老けた男やらが数人続く。その数人は戦場に出たいかつい顔のトレバン將軍を除いて皆一様に入室してきた法男を見て目を丸くする。

今はこの世界によくある服を身につけてはいるが、やはりその身長は初めて見る者を圧倒せずにはいられないようだった。ただ、ターニヤを脅えさせたその凶悪な容貌は長い髪が目の下まで垂れ隠し、いくぶん和らいでいる。

一緒に入ってきたアラミアは入り口に一番近い席を法男に指し示し、一礼して退室した。

法男は座らず奥の人物を見る。

「事情と名前は既に聞かせてもらいました。ヨシオカ・ノリ才殿、座って下さい」

王冠をつけた最奥の男が法男に言葉を投げ掛ける。法男は言われるまま、会釈して席についた。

「私はこのサラティア王国の王、ポトロス。このターニヤの親でありその行動を許可した者です。全ての責任は私にあります」

隣のターニヤがビクリと肩を震わせた。法男は状況を理解した。

「不思議な事だったとは思うが俺の出来る事はさせてもらうつもりだ」

「感謝します」

ポトロスは微笑んだ。ターニヤはほうつと息を吐く。

「我がサラティアの主たる戦力は魔法を使う部隊でした。しかし、攻めて来ている敵に魔法が効かない今の状況ではこちらのアトロス率いる親衛隊が一番の要となります。ノリ才殿には彼の部隊に所属して頂き、彼と行動を相談して決めて下さい」

「承知した」

法男はアトロスを見た。アトロスは微笑み、よろしく、とでも言うように会釈してきた。法男も表情を緩め、頷き返す。

ターニヤはそんな二人を複雑そうな目で見ていた。

会議が終わった。

部屋を出る時、いかつい顔のトレバン將軍とアトロスに呼び止められ、次の日以降の打ち合わせが行われた。

「……と、いう事なので招集がかかるまでは自由にしてもらってかまわない。まずは剣と鎧を用意するといいだろう。明日、私がアラミアが案内しよう」

それでは、遅くまですまなかった。ゆっくり休んでくれ。と、言い残し二人も部屋を出ていった。入れ替わりにアラミアが入ってくる。法男はその後ろに小さな影を見つけた。ターニヤだった。

「部屋への道は覚えている」

ターニヤの方は見ず、アラミアに言う。

「それでは案内は不要という事で。それと、ターニヤ様がお話が、との事なのですが」

法男はターニヤを見る。

巨大な、具体的に言うところ二〇六センチの法男の胸にも届かない小柄な身体。顔つきにはかなり幼さが残る。十七歳の法男から見ても子供という印象が強い。年頃の法男にとっては、既にあまり興味の無い相手だった。

一方、隣に立つアラミアは二十を超えているであろう。均整なプロポーション、品があり理知的な美しい顔立ち。なんとか自然さを装いながらお近づきになりたいと思わせる、清楚さと可愛らしさと色香を併せ持つ魅力的な大人の女性だった。

しかし、ターニヤは自分を召喚し、自分が放り投げてしまったと

いう強い関わりを持ってしまった女の子である。

「あ、あの……」

小さな声で話しかけてくるターニヤになるべく柔らかく頷き、続きを促す。

「本当にすみませんでした」

法男は頷く。もう、すでにどうでもいい事ではあったが、この少女の気がすむのなら付き合おう。

「それで、あの、何か私に出来る事は無いでしょうか？」

法男は考える。別に自分にして欲しい事は無い。だが、この場を無難に乗り切らなくてはならない。隣に気を引きたい女性がいる。

「お前は魔法使いなのだろう」

この問いかけに意味は無い。ただの突破口である。

「は、はい……」

ターニヤは苦し紛れの言葉だとは思わず殊勝に頷き、真摯に次の言葉を待つ。

「俺は剣士だ」

「はい」

ここに来てようやく法男にこの会話の着地点が見えた。

「ならば、お前には俺に出来る事なんて無いという事が分かるはずだ」

「え……？そ、それでは」

突き放すような言葉に動揺し、ターニヤはすぐるような声を出してしまふ。

「だが、お前にはお前にしか出来ないこの国の為にするべき事があるはずだ」

「あつ……」

この人はさっきの会議中、自分の出来る事と言った。自分の役割を果たす、と。ならば私も私の役割を果たさなければならぬ。この国の王女として、この国の第一王位継承者として、この国最大の魔力を持つ魔法使いとして。それは何か？ それはこの人に

尋ねる事は出来ない。自分で見つけるしか無いだろう。

ターニヤは法男の苦し紛れの適当な言葉に回答を見つけ、晴々とした表情になった。

「ありがとうございます！でも、もし、何か困った事があったら何でも言っして下さいね！ぜったい力になりますから！それじゃ、おやすみなさい！」

少し頬を赤らめながら手を振り振りターニヤは退室していった。

どうやら想像以上に上手くこの場を乗り切ったようだ。法男は残ったアラミアを見る。アラミアは感心したような、羨望の眼差しで法男を見つめていた。

法男は得意になり、期待を込めてアラミアが口を開くのを待つ。

「それでは、長い一日だったでしょう。ゆっくり寝所にてお休み下さいませ」

暖かく、優しく、気遣いに満ちた表情でそう言い、深々とおじぎをされ、法男は自分にあてがわれた部屋に戻るしかなかった。

「でけえな、おいっ」

そう言った男は丸かった。年老いたドワーフ。名をブランという。ここ、サラティアの王都サラティスで古くから鍛冶屋をしている。

「こんにちは、ブランさん。この人は……」

「ああ、知ってる知ってる。ターニヤ王女が魔神と間違っって召喚しちゃったんだろ？ 町中その噂で持ち切りだよ」

ど、どこから……？ と、アラミアは焦ったが、ターニヤが魔神召喚の儀式をやるのでは、とは前から至る所で囁かれていた事だ。突如出現した巨大な、異様な服装をした男を見れば憶測だけで容易に到達する推論だった。

「いやあ、しかし、ターニヤちゃんが魔神と間違えたのも無理無いね。こりゃ、初めて見た奴は間違いなく魔神だと信じ込んでしまうだろうよ」

ブランの遠慮の無い率直な悪口にアラミアは焦り、なんとかごまかそうとあわあわと手を動かす。しかし、ブランの口は止まらない。「そうだ、国が正式な声明で『王女の召喚は成功し、巨大な魔神が現れました』と言えばみんな信じるよ。帰ったらポトロスにそう言っといてくれ」

わっはっは、ブランは楽しそう。

あわわ……、アラミアは慌てる。おそろおそろ振り向くと、法男は苦笑していた。

ほっとしたアラミアはブランをきつと睨みつける。

「ブランさん、いい加減にして下さい！ 温厚な私もしまいには怒りますよ！」

「ごめんごめん、全く悪びれない態度でブランは謝った。しかし、それで満足したアラミアは用件の方を切り出した。

「こちらの、ヨシオカ・ノリオ様に合う剣と鎧を作って欲しいので

すが」

ふむ。予想はしていただろうその言葉を聞いて初めてブランは表情を引き締めた。腐っても年老いてもドワーフとしては変わり者だったとしても現役の鍛冶職人である。仕事に向かう時は常に真剣であつた。

「ヨシオカ」

「うむ？」

法男は察し、アラミアの前に出る。アラミアも邪魔しないよう法男の影に入る。

「こちらの剣を使ったそうだな」

「うむ」

「使い心地はどうだった？」

「軽い」

ぷつ。ぶあーはっはっはっは。ブランは笑う。

「そりやまあ、その体じゃあねえ。この国のどの剣も軽く感じるだろうよ。三本ぐらいまとめて握ればちょうど良かったんじゃねえか？」

わっはっはっは。

大丈夫。こんな態度であつたとしても不真面目だつたとしても口は悪かつたとしてもふざけていたとしてもブランは真剣である。例え真剣じゃ無かつたとしてもなんとかなる。

「後は？」

「柄の部分が短い。俺が使っていた剣術では両手で、離して、握る」
こう、こんなふうに。法男はエアー竹刀を握り、ブランに示す。

ほう。ブランは興味を引かれたようだ。長い木の棒を取り出して来て法男に渡す。自分が持ち易いのはどの長さだ？ 扱いやすい重さはどれくらいだ？ ブランは今から作る剣のイメージを具体的にしていく。

「三日くれ」

「ありがとう、ブランさん！」

結局、法男用の剣の製作にめどはついた。なんとかなった。アラミアも不安が消え、ほっとした様子だった。

「じゃあ、次は鎧ですね」

「えっ？」

「え？」

「いや、待ってくれアラミアちゃん。今から今まで作った事が無いような剣を作るんだ。鎧までは神経がまわらねえ」
ちっ。

使えねえ。なんてアラミアは思うような女性では無かった。

「はあ……、しょうが無いですね。剣を作り終えるまでは他を当たってみます」

肩を落とし、心底がっかりした様子を見せ、相手にプレッシャーを与えるような女性だった。

「わ、悪いな。きっちり剣を仕上げたらその時また鎧の方にも取りかかせてもらうからよ」

締め言葉はもちろん本人だ。

「感謝する、ブラン」

サラティスは城塞都市である。城壁で囲まれた街の中にまた城壁で囲まれたサラティア城がある。

いきなり戦時中となったこの状況下。避難する者もいたが、まだ少数に止まっていた。いつでも隠れ、逃げれるように備えてはいても通常どおりに店を開いてる者の方が多かった。

「この街で一番大きい武器屋がここなんですよ」

法男はアラミアとのランデブーを満喫していた。街行く人々は巨

大な身体の法男をぎよつとしたり目を丸くして見つめるが法男は気にならないようだった。慣れているのだろう。元の世界でもそうだったのだから。

「やっぱりサイズ、無いですね……」

この世界の身長分布はほぼ現代日本と同じぐらいである。通常、二〇六センチの身長に合う鎧なんて作られる事は無い。

「一応、何件か回ってみましょうか」

法男は頷く。このランデブーの間、ほとんど法男は喋っていない。無口なのは法男がこの世界に召喚される前、日本で高校生として暮らしている時から同様であった。

巨大な身体。剣の道を極めるという己の定めた目標の為、鍛錬に明け暮れ、同級生と関わりを持たない、寄せ付けない日常。剣道部にも所属せず、山の中で熊や猪相手に木刀を振り剣を磨いてきた。「どうします？代わりになるものでもさがしましょうか？」

「いや、鎧はもういい。それより頭に巻く布か何かがあるとありがたい」

アラミアははっと法男の無造作に垂らされた髪を見る。そして、頬を赤らめる。そして、ほっとしたように頷く。

「それでしたらいろいろ揃っているお店を知っています。こちらへ二人でランデブー」。

「ノリオ様、」

「うむ？」

「ノリオ様がいらした世界とはどのような世界だったのですか？」

「ああ、」

「はい」

「魔物なんていない、平和な世界だったな」

「はい」

「戦う事なんてほとんど無かったな」

「はい」

「だが、争いはあった」

「……はい」

「それで、魔法なんてものは無い」

「はい」

「その代わりの、道具がいろいろあった」

「どのような？」

「遠くの人と、魔法を使わず話す道具とか」

「へえ、道具で」

「空を飛んだり」

「それは……魔法でも出来ませんよ。ノリオ様のいた世界、こことは全く違う世界なのですね」

「いや、ことあんまり変わらないさ」

「……ノリオ様がいた世界、何と言う名なのですか？」

法男は少し考えた。しかし、少しだけだった。

「日本」

ターニヤは昼食後の時間を自室で過ごしていた。

広々とした部屋に女の子らしい装飾。その壁の一角にこの部屋に似付かわしくない真っ黒な巨大な服がかかっていた。

椅子に腰掛け、法男から預かった変形学生服をぼうつと眺める。

「……」

自分に出来る事。何だろう？

ターニヤは考える。

……あの人はどこから来たんだろう？

この国の事の為に出来る事を考えようとしてるのに浮かんできるのはあの男の事ばかりだった。

立ち上がり、壁に掛けてある学生服に近寄る。服をめくった。裏地には奇妙な文字のようなものが白い糸で刺繍されていた。ターニヤには読む事が出来ないその紋様は法男がやってきた世界を感じさ

せられるものであった。

……どんな世界なんだろう？

ターニヤは法男と法男の世界に思いを馳せた。

「武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり」

夕食は兵舎で取った。法男は親衛隊に所属とはいえ、一介の兵士ではなく王家の賓客扱いをされている。食事も兵舎ではなく自室で取る事も出来たのだが法男が希望したのであった。王家の者用に用意された食事は豪華であろうが法男には量が不安だったのだ。大勢の集まる場所であつたら好きなだけ食べられるだろうというイメージからだ。希望は叶い、満足した法男はすぐに自室には戻らず、中庭の片隅で筋肉トレーニングを始める。腕立て、腹筋、背筋、スクワット。並外れた量をこなしていた。

汗にまみれた法男は夜空を見上げる。

元居た世界と同じく輝く星々。しかし、見た事のない配置が異世界である事を実感させた。

そして、これまた同じくまあるいお月様。

この世界の月の表面ではウサギが餅をついているようだった。

「ちっ」

店に入ったとたんに舌打ちの音が聞こえた。

「いらつしゃい、でかいの。今日はかわいいアラミアちゃんは後から来るのかな？」

「いや、今日は俺一人だ」

これ見よがしに肩を落としたため息をつくブラン。

そんなブランに法男はかまってやるそぶりも見せず、用件を切り出す。

「頼んでいた剣はもう出来ただろうか」

そんな法男をかまってくれよとかノリ悪いんじゃないのかそういった目でちらりと見た後、ブランは苦笑をもらす。

「ああ、これだ」

自分の身長よりも大きな剣をふらつきもせず法男に渡す。

自分の鳩尾ぐらいの長さのその剣を法男は受け取ると握り具合を確かめる。

「良いようだ」

「振ったりしないのかい？おっと、やるんなら店の外で、だけどな」

「ああ。気に入った」

「そう言ってもらえると苦労した甲斐があるってもんだ。その剣は俺が作って来た中でも渾身の一振りだ。大切にしてくれ」

ブランは少し嬉しそうだ。

「約束しよう」

「頼むぜ。戦で使ったりせず、床の間で大事に飾っておいてくれよ」
がっはっは。

「いや、それは出来ない」

はっは……。

「はあ、お前を見てると俺達を思い出すぜ……」

「うん？」

法男には言葉の意味が分からない。

「ああ、俺達ドワーフの事だ」

「なるほど」

まだ分からなかったが分かったふりをする。

「俺達ドワーフは、な。酒と鉄と沈黙を愛する種族なのさ。寡黙で変化を好まず、ただただ自分の技量を磨く」

目の前の男には全く当てはまらないな、と思ったが法男はあいづちを打つ。

「人間が嫌いだね。泣いたり笑ったり怒ったり忙しい連中の近くにいると落ち着かねえ、って。穴蔵に籠もっているのさ」

「似てるか」

俺が。

「うーん？」

ブランはニヤニヤと笑い、法男の顔を覗き込む。

「いや、やっぱり似てねえか」

お前も俺が愛する人間の一人に間違いないえ。

一・終

「敵襲―――！」

見張りの声が響き渡る。

サラティア軍は陣容を整えつつ出撃する。もう、この前のようにこの城門をくぐらせるような事はしない。そう誓いながら。

親衛隊は先頭に立ち、難敵を探す。

他の隊にはかなりの数の志願兵が混じっている。俺達が一番の強敵に当たるんだ。それは命令ではなく、親衛隊全ての隊員の意志であつた。なによりも率いるアトロスの、俺がこの国を守る、という強い思いがあつた。

そのアトロスは先頭に立つ。サラティア軍の一番前だ。そしてその隣には鎧もつけず腕まくりをし、ちょんまげ姿の法男が立つ。

遠くに人影が見えた。一体だけ。迎え撃つ兵士達は違和感を覚えた。

それは大きさだつた。

「ジャイアント……」

どこかから眩きが聞こえた。近づいて来るに従つて敵は一体ではなく、その足元に多数の見慣れた魔物達がいる事が分かつた。前回城門を破つていったオーク達、も。

兵士達に動揺が走る。目に脅えの色が浮かんだ兵士もいたかもしれない。

それも無理のない事であつただろう。

先頭に立ち、大股で近づいてくる凶悪な顔、巨大な身体。額に奇妙な十字が浮かぶその身体は通常の人間の十倍はあつたであろう。何人でかろうが人間の力ではとても歯が立たないのはこれまでの経験で分かつていた。

魔法が効けば　そんな思いをここにいる兵士達の何人の胸をよぎつたであろう。

アトロスはぎりつと歯を噛みしめる。妹の顔が浮かびそうになる。拳をぎゅつと握りしめる。落ち着いた声が聞こえる。

「俺があいつをやるう。他を頼む」

はつと隣を見た。脅えも動揺も一切感じさせない横顔があった。

法男は剣を抜き放つとそのままジャイアントに突っ込んでいった。アトロスは制止しかけた手を止め、号令を放った。

「ジャイアントはノリオ殿が倒す！我々はオーク共を片付けるぞ！。一匹たりともここを通すな！」

その声が響いた瞬間サラティア軍から動揺が消えた。次々と剣を抜き敵に突っ込んでいく。

戦いが始まった。

ジャイアントが法男の方を見た。咆吼をあげる。最初に叩きつぶす敵だと認識したのだ。法男は間合いに入ろうと突っ込む。そこに拳が唸りを上げて迫ってきた。その巨大さからは想像も出来ないスビード。紙一重で見切るなんて二メートル四方はありそうなその拳相手では無理な話であった。

ノリオは間髪横つ飛びに避ける。ものすごい風圧が体を横切っていく。体勢が崩れた法男に次のパンチが飛んでくる。後ろに下がるしかなかった。ジャイアントは巨大な一歩で易々とノリオを射程に捕らえると拳を放って来る。

法男は転がり避ける。前に向かって。

俊敏に立ち上がるとそこにはジャイアントの巨木のような足。必殺の剣を横に一闪 かきん。乾いた音がした。それだけだった。足が持ち上がる。法男は頭上から落ちてくるそれを必死で避けた。

周りで戦っている兵士達にも法男の劣勢さは一目瞭然であった。しかし、兵士達の心に絶望は迫ってこない。

なんと、あの男はジャイアント相手に戦っている。

一人で。

我々は隊長の指示に従い、我々の敵を倒そう。

そして、あの男の加勢に……。

その兵士達の意気を嘲笑うかのような魔物の数であった。

法男は覚悟を決めた。

逃げているだけでは突破口は開けない。

俺が握っているのはブランが作ってくれた剣だ。

ジャイアントが咆吼する。次に繰り出してくる拳は気合いが乗ったものだろう。

凄まじい風を切る音と共に迫ってくる巨大な拳。

法男は避けない。

法男も裂帛の気合いと共にブランの剣をその拳に叩きつけた。

アトロスは裂帛の気合いと共にその剣をオークに叩きつけた。

崩れ落ちる巨体。

次の敵、探そうとした時、金属が折れる音が聞こえた。

折れる剣。止まらない拳。

二メートル四方の塊が体にぶつかってくる。

肉の潰れる音。

骨が碎ける音。

自分を後方に持っていく力に逆らわないようにしてても。

法男は吹き飛んだ。

地面に叩きつけられる。

体は動かない。

この世界、魔法と言えば攻撃魔法である。治癒魔法は存在しない。遠話等、補助的なものは少数存在したが、特別な魔法と言えば特別な者しか使えない召喚魔法のみ。戦いにおいて役に立たなくなったこの国の魔法使いは裏方にまわり、雑用をしていた。

飲み物を冷やし、部屋を涼しく保つコールド系の魔法使い。

風呂を焚き、肉を焼くファイヤー系の魔法使い、など。

今では自分達を守ってくれている大切な存在となった剣を持って戦う魔法を持たない兵士達のサポートをしていた。

そして。

魔法を使う戦いにおいて最強の存在、最強の戦士、ターニャは物見台にて戦いを見つめるしかなかった。

この戦いが始まって以降、常に先頭に立って戦う兄の姿を見続けた。

見るだけしかできない。

今日も、また。

肉弾戦においては人間では決して勝てないジャイアントが現れるところも。

その巨体に向かっていく小さなちょんまげ姿も。

剣が折れ、ちょんまげが吹き飛んでいく様も。

何も出来ない。

見ているだけしかできない。

何も。

見てるしか。
ターニヤは悲鳴を上げた。

ジャイアントは確認しない。

なかなか攻撃が当たらなかったが結局はいつも通り。
自分の拳をくらった相手がどうなるのかなんて分かりきっている。
さて、次は。首をめぐらした時、近くで意外なものが見えた。
動かない物が動いたのだ。いや、立ち上がったのだ。
こちらを向いている。両手には何も持たずに。

ジャイアントは動揺しない。

今までなかった事が起こった。それだけの事である。
戦いを続ければ、いい。

意識は、無い。

いや、ある。

よく分かりません。

体が動かなくなった、そう認識した時、走馬燈のかわりにひとつ
の言葉が浮かんた。

「武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり」

言葉の意味なんて知らない。

侍なんて見た事ない。

だけど。

だから、立ち上がっていた。

拳を握りしめて。

巨大な塊が迫ってきていた。どう動けばいいのか分かっていて、体が動く。

渾身の力を込めて自分の拳をぶつけた。

空気が軋む。

次元だつてゆがんでいたかもしれない。

片方の手がつぶれていく。

もう片方の手は押し込んでいく。

悲鳴らしい咆哮が上がる。

進む。

足が見えた。拳を振り上げ叩きつける。巨大な存在が沈んでいく。

近づいてくる巨大な顔。

咆哮を上げたかもしれない。叫んだのかもしれない。

よく分からなかった最後の一撃。

戦いは終わった。

ゴンツ。硬い物がぶつかり合う音が戦場を揺らした。

戦っていた手が止まり、そちらを見る。

巨大な拳と小さな拳がぶつかり合っていた。肩を引いたのは巨大な体の方。拳を押さえ、体をのけぞらせ悲鳴をあげる。ありえない光景だった。何が起こったのか、目に見える光景が頭の中に入っていない。

ふらつと小さなちょんまげがふらつき巨人の足元に入る。手をついた、かのように見えたがその手は固く握られていたらしい。再び巨人の悲鳴が上がり、巨体が崩れる。ちょんまげは落ちてくる顔めかけて構えている。

「サムライ・パーンチ！」

良い声が戦場に響いた。

続いて大きな破壊音。

ちょんまげのアップーカットがジャイアントの顔面に炸裂していた。

ジャイアントは倒れ、動かなくなった。その横でちょんまげも倒れ、動かない。

まわりは哑然としている。アトロスは目の前の大きな隙を見せているオークを斬り捨てると法男に駆け寄る。数人の兵士がそれに続く。

「ヨシオカ！」

法男の手がピクツと動いた。ふうつと息を吐くアトロスであったがそのまま法男が立ち上がるうとするのを見て慌てた。

「お、おい。無理するな。お前らノリオ殿を城に……」

「戦いは終わったのか？」

アトロスははっと周りを見渡す。剣戟の音があちこちで聞こえる。

「ああ、俺はすぐに戦に戻るがヨシオカは城へ……」

「無用だ」

片膝をついたまま立ち上がれないでいる法男は強い眼差しでアトロスを見た。

「ヨシオカ……」

アトロスは言葉を出せなくなってしまう。

法男は周りの兵士達を見回し、言う。

「俺の剣は折れてしまった。すまないが誰か剣を貸してくれないだろうか」

「こ、これを……あつ……」

一人の兵士が剣を渡そうとし、その渡そうとした剣を見て躊躇いを見せる。

その剣はボロボロだった。刃は欠け、血糊に塗れ、ジャイアントを倒した勇者に渡すのは躊躇われたのだ。

「い、いや、誰かもつといい剣を」

「それを貸してくれ」

大きなボロボロの手が差し出された。

「あ、ああ」

ボロボロの鎧を着けた兵士が剣を渡した。

「ありがとう」

法男はその兵士に微笑みかけた。そして、その剣を支えに立ち上がった。

「この戦い、勝とう」

二メートル六センチが声を掛ける。

「ああ、絶対に」

アトロスの顔が再び戦士のものになる。

「おう。そして、皆で凱旋だ」

「すぐに終わらせてくるぜ」

「帰って皆でうまい酒でも飲もうぜ」

兵士達も口々に答える。

「いくぞ！お前達！サラティアの強さを見せてやれ！」

ジャイアントが倒れた事は魔物達に動揺を与えた。

そして、そのジャイアントを倒した男は倒れたジャイアントの傍らに胸を張って立ち、こちらを睨みつけてくる。

魔物達に脅えとひるみが生まれる。

対してサラティアの兵士達の士気は最高だった。

ジャイアントが現れた時点で負けはほぼ決定していたのだ。それをあの異世界から来た男が相打ちに持ち込んでくれた。残った敵は俺達だってなんとかなる。なんとかしてみせる。あのちゃんまげの犠牲を無駄にはならない。

法男の甲い合戦に兵士達は奮戦した。

最後の敵の影が消えた。

アトロスは法男目指して走る。他の兵士達も。

法男の目の光が弱くなっていた。集まってきた兵士達を法男は見回し、その男を探す。

見つけた。

法男に剣を渡した兵士もまた、生き残り駆けつけていた。

法男は男に剣を返す。

「ありがとう。とても良い剣だった」

男は受け取った。法男はそのまま前に倒れ込む。男の空いていた方の手と横から伸びて来た大勢の手で巨体を支える。

「お、おい、ノリオ殿を急いで城へ！」

いつもならアトロスの命令にすぐに従う兵士達もこの時ばかりは命令の前に行動していた。

「急げー！」

「死ぬんじゃないぞー！」

「手が空いてる奴あ先行って薬と酒を大量に用意しとけー！」

「料理もな！」

兵士達は法男をかついで城に駆けていく。

戦いは終わった。

第二話 ウェスタン・アタック

「魔神召喚を行います」

あの戦いから二日経ち、傷の癒えた法男の部屋を訪れたターニヤはそう言った。

止めるべきだろうか？ 法男は考える。

また失敗し、俺のような人間が召喚されてしまうのかもしれない。失敗して現れた魔神にターニヤは殺されてしまいかもしれない。

だが、成功するかもしれない。

この前の戦いを思い出す。結果的に勝てはしたが自分も瀕死の重傷を負ってしまった。もし、ジャイアントが二体だったら今頃全てが終わっていただろう。

自分は非力である。この国を救う事なんて出来はしない。

この国の者の判断に自分が口を出すなんて出来ない。

「そうか」

ターニヤは法男にどんな言葉を期待していたのだろうか？ 法男の言葉を聞き、ほつつと息を吐く。そして、ふうつと息を吸い込む。

「あ、あなたをもつ、危険な戦いを必要する、いく必要が、もつ、

あの、えーと……」

惜しかった。

「条件がある」

そんなターニヤに法男の言葉が降って来た。

「え……？」

混乱してしまっていたターニヤは何故法男に条件を出されなければならないのか、なんて疑問を持つ余裕が無かった。

「俺も立ち会わせてもらおう」

青く光る魔方陣。その前で呪文を詠唱するターニヤ。少し離れて法男。そして、その隣にもう一人。

この部屋の管理人、エルフのミレーニユだった。今回の召喚に法男が立ち会うと聞いたミレーニユは条件を出したのだ。自分も立ち会う、と。

法男は隣に立つミレーニユを見る。

美しい。しかし、その美しさは法男の目には芸術品のそれとしか写らなかった。しばらくその美しさを堪能してから視線を魔方陣に移す。

青い光は輝きを増す。

空気が濃密になる。

ターニヤが叫ぶ。

「サラティアの名の下、出よ、魔神！」

青い光が部屋に満ちる。

法男もミレーニユも目をつぶってしまう。

そして、光が消え、二人は目を開ける。

そこには。

思わずミレーニユは息を飲む。

見上げる程に巨大な姿。法男が戦ったジャイアントとほぼ同じくらいであろう。その体を包むのは鎧か皮膚か。青と銀に彩られ、不自然な程に美しい曲線と直線で形成されている。

その足は体に対して極端に大きく、前後に車輪のようなものがついている。逆にその腕は細い。片方の腕に奇妙な筒のような装飾がついており、その筒から太いひものような物が背中に伸びており、それが背負っているリュックサックにつながっていた。

巨体がリュックサックを背負っている。こっけいに聞こえるが、その黒光りしているリュックサックはとても格好良く様になっており、巨体によく似合っていた。

そして頭部。頭があるべきところには何も無かった。代わりに、なのだろうか、胸の位置に昆虫の目を思わせる黒い半球状の物が付

いている。

あまりにも異様、異質。

ターニャは確信していた。ついに自分は魔神を召喚する事に成功したのだ、と。しかし、その自分が召喚した魔神に圧倒され、言葉が出ない。

震える心を必死に立て直そうとする。

ミレーニユは違和感を感じていた。現れたのは異界の住人ではなく、異界の置物なのではないか、と。

法男は思った。

(ロボット……)

巨大ロボ。フィクションの世界ではおなじみの存在。目の前にあるものはそうとしか見えなかった。

もし、その通りだとしたら確かめなければいけない事がある。

「魔神よ！」

ついにターニャは言葉を発した。かすれた、それでも精一杯大きな声で。

「私の望みはこの国の危機を払う事。汝の望みを申されよ。そして、我と契約を！」

応えは、無い。どころか、ぴくりとも動かない。

「魔神よ！」

なおもターニャは呼びかける。

「ターニャ様……」

ミレーニユはそんなターニャに声を掛けようと歩み寄る。

法男も動いた。巨体の方へ。

「ノ、ノリオ」

その動きに気がついたターニャは不安げに声を掛けた。

法男は振り向き、力強く頷いてみせる。それだけでターニャは何も言えなくなってしまう。

不安そうに見つめるターニャの肩にぽんと優しい手が置かれた。ミレーニユも微笑み頷いて見せる。任せてみましょう、と。

巨体のすぐ足元まで来た法男は見上げる。よく見るとはしごのよ
うな物や、足場のような場所があり、胸の半球に繋がっていた。

おそらく常用されるものではなく非常用のものだろう。

法男は恐れる様子も見せず、力強く登りだす。

ターニヤははつと息を飲むが、声を出す事はなく見つめ続けた。

やがて、法男は黒色の半球にたどりつく。近くで見るとそれは半
透明になっていて中が透けて見えた。

人影。パイロットはいたのだ。

若く見える。若いと言うよりも幼いと言っていいかもしれない。
その子供はコックピットに座って寝ているようだった。

法男はハッチをこんこん、と叩いた。中の男の子が目を開けた。

「う？うわー！上官殿、私はサボっていたのではなく操縦席のメン
テナンスをー！……お？」

少年の焦点がハッチの向こうの法男に合う。

「あれ？えーと……？」

「開けてくれ」

「え？う、うん」

声も届くようであった。法男が身を離すとハッチは上に跳ね上が
る。

少年の目に見慣れぬ風景が入ってくる。

「あ、あれ？ここは？」

「うむ。ちよつと立ってみてくれ」

「え？」

何の脈絡も無い言葉だったが、訳も分からず呆然としている少年
は法男の言葉に素直に従った。法男はそんないたいけな少年の腰に
腕をまわし、肩に担ぎ上げるのだった。

「ちよ、ちよつと？」

問いかけてくる少年に何も応えず法男は降り始めた。

「どうやら今回も失敗だったようだな」

法男は呆然と見つめ合う三人に容赦の無い言葉を投げる。

「え？それではこの子もノリオの世界の……？」

「いや違う」

あつさり否定する法男。

「おい、お前、この子ってなんだこの子って」

「え？あなたの事なんだけど……」

急に食って掛かってきた少年にターニヤは戸惑う。

「おいおい、お前の方が子供だろ！お前いくつだよ！」

「じゅ、十五歳だけど……」

ターニヤは何故だか法男の方をちらちら見ながら答える。

「うつ……ひ、一つしか変わんねえじゃねえか！」

「え？十四なの？……へえ」

それにしても幼いわねおほほという視線に少年はかちんと来たようだった。

「ば、馬鹿にしてんじゃねえぞ！俺様はサウロス史上最年少で保安官になった男。天才ウォー・ホース乗りと呼ばれたケイン・ウエスト様をなめんじゃねえ！」

「ほう。保安官」

社会人とは。法男は少年を見る目を変えた。

「おおよ！」

「ウォー・ホースとはあれか」

巨体を指す。

「おう！あれこそが俺様の愛機、マッド・ダディの最新作、W H - 36『エクリオス』だぜ！」

「ほう」

感心する様子の法男にケインは気を良くしたようだ。

「おう！聞いて驚け、こいつは可変型W・H^{ウォー・ホース}。長距離を走る時には変形し、より速く、サスの効いた快適な乗り心地を実現させたW・

「H乗り達垂涎の名機」

「ほお」

「もちろん戦闘力も特上！左腕のレイル・ガンはけっこう遠い敵でも撃ち落とし、右腕のアーム・ガンは近い敵を打ち抜くぜ！」

うんうん。

法男はかなり興味を持ったようだ。ケインの話を熱心に聞く。

その横で啞然としながら二人の会話を聞いていたターニャだったがそこまで聞いて口をはさんだ。

「あ、あの、あなた戦えるの？」

「戦える？何言ってるんだ。保安官が戦えなくてどうすんだよ。日夜荒くれ無法W・H乗りどもをぎったんぎったんにしてやってるぜ！」

このエクリオスでな、と親指で巨大口ボを指し、ケインは得意そうな顔を見せる。

「あ、あの、それだったら私達に力を貸してくれない？」

「え？」

ケインはどういう事なのか分からない。

「ここはお前がいた世界とは違う世界でこの人は強い敵に襲われて困っている。それで、お前の力でそいつらをぎったんぎったんにして欲しいそうだ」

法男が横から助け船を出した。

「違う……世界？」

「そうだ。この世界のどこにもお前が住んでいた国は存在しない」

「強い、敵？」

「まあ、それは実際見てもらわないと説明し辛い」

「……………」

呆然とするケイン。

「お願い！私達の国が滅びそうなの！あなたの力を貸して！」

「……じゃねえ」

ようやく事態が飲み込めたようだ。ケインはぼつりと呟く。

「え？」

「冗談じゃねえ！何で俺がそんな事しなきゃなんねえんだ！俺は保安官だ！サウス地区の平和を守らなきゃいけないんだ！俺は帰る！」

「そ、そんな……」

激昂するケインにターニヤは涙目になってしまふ。

「うつ……そんな目で見たって駄目なものは駄目だ」

ケインは少し声を柔らかくして、それでもターニヤの望みを突っぱねふいつと横を向く。

「ね、ねえ……」

なおもすがろうとするターニヤの肩に大きな手が置かれた。

「あまり無理は言つな」

ターニヤはびくつと振り仰ぐが法男の目は優しくかった。

「で、でも……」

「彼には彼の事情というものがあるのだろう。それに……」

法男は扉を指差した。

「あの扉はあのW・Hウォー・ホースが出るには小さ過ぎるようだ」

「あつ……」

ターニヤは扉を見つめる。そして、横を向き横目でこちらを伺っていたケインの方を向く。さつと目をそらすケイン。そんなケインを見つめ、やがてはあつ、とため息をついた。

「分かりました。ウエスト、あなたには迷惑をかけてしまい申し訳ありませんでした」

ターニヤはケインに頭を下げる。

「い、いや、分かってくれりゃいいんだよ」

ケインは頭をぼりぼりとかいて照れくさそうだ。

「それでは許して下さいですね」

「ああ、ああ、もういいって。済んだ事は気にするな
ははっ。

ふふっ。

法男とミレーニユも照れくさそうに笑い合う二人を眺め、やさしく微笑む。

争いは終わった。

「じゃあ、俺を元の世界に帰してくれ」

「えっ？」

「え？」

コトリ、お茶がテーブルに置かれる。

「ありがとう」

法男はカップに手を伸ばす。その向かいでケインはぶすつとした表情で腕組みをしている。ミレーニユはそんなケインを気遣いながら自分も座る。

三人は魔方陣の部屋の隣に位置するミレーニユの部屋に移動していた。周りは本棚で囲まれ、ぎっしりと様々な本が詰まっている。書庫にテーブルとベッドが置いてある、といった印象だ。

ターニヤはベソをかきながら、お父様に報告してくる、と席をはずしていた。

「……呼びつけておいて帰し方が分からないってどういう事だよ」
ボソッとケインが呟く。さっきさんざん怒鳴りちらしたのにまだ気がおさまってないようだ。

「すみません、ほんつとうにすみません」

ミレーニユは申し訳なさそうに何度も頭を下げる。

その様をケインは見えてしまい、その美しさに心を奪われ見とれてしまう。そして、顔を上げたミレーニユと目が合ってしまった、頬を赤らめ目をそらす。

「災難だったな」

法男がなぐさめる。

「いや、お前、」

「おっと、忘れていたな。俺の名前は吉岡法男。よろしく」
何か言いかけたケインを法男が遮る。

「ヨシオカ？変な名前だな。どっちが名字？」

「吉岡の方だ」

「え？そうだったんですか？」

ミレーニユは驚く仕草も美しい。

「ああ」

「やっぱり異世界の方なんですネ……」

ミレーニユは感心する姿も美しい。

「いや、ちよつと待つて。この世界はどの国も名前が先なんだ？」

「あ、ケイン様の世界では両方あるんですね」

「う、うん。もちろん僕はケインの方が名前だよ」

美しいミレーニユに話し掛けられ、ケインは赤くなってしまう。

が、すぐにはつとして、きつと法男を睨みつけた。

「いや、そうじゃなくて、ノリオ、お前も召喚されたんだろ」

「ああ」

「だったら何で帰れないってここの連中に教えなかったんだよ」

「うむ」

法男は腕を組み、目を伏せ、難しい顔をして黙り込む。ケインは

法男の答えを待つ。が、法男はなかなか口を開かない。

「いや、だから何で言わなかったのか聞いてんだよ！」

しびれを切らしたケインが重ねて聞いた。

「うん？うーん、聞かれなかったし、」

法男は視線を宙の何も無い所を漂わせながら答える。

「そんな大切な事は自分から言え！」

「俺は無口なんだ」

「理由になんねえよ！」

「ま、まあ、ウエスト様、悪いのは私達なんですから、そのへんで

……」

「いや、別に攻めているつもりは……あ、あの、お姉さん、」

「あ、私はミレーニユ。ただのミレーニユで、ファミリーネームはありません」

「あ、うん。ミレーニユさん、ずっと気になっていたんだけど、個性的な耳ですね」

「あ、私はエルフで人間じゃないんですよ」

「エルフ？」

「はい、エルフというのは森と自然と音楽を愛する種族で……」
会議は踊る、されど進まず。

この部屋に入った理由は帰る方法を探す為、魔法とこの国の歴史に詳しいミレーニユに魔神召喚について詳しい話を聞こう、であった。

「まあ、サウロスではW・Hウォー・ハウスに乗れるかどうかは何より優先されるからな」

「でも、あなたみたいな幼い子供が……」

「子供じゃねえって！……そういえば、ミレーニュさんの歳っていくつなんですか？」

「あ、六二八歳です」

「うえっ！？」

「意外だな」

「お前が十七だって事の方が意外だったよ！」
トントン。

ノックの音がした時の議題は「サウロスの社会制度とミレーニュの個人情報について」であった。

「あ、どうぞ」

常に議題に入っていたミレーニュが答える。ドアが開き、しょんぼりとしたターニヤが入ってくる。ミレーニュは元気づけようと声を掛けようとしたが、続いて入ってくる人影に気づいた。それは、難しい顔をしたアトロスだった。そして、アトロスに続いて王冠をつけた威厳のある壮年が入ってくる。

「ポトロス陛下！こんなところまでわざわざ……」

ミレーニュは慌てて立ち上がる。ケインはもちろん座ったまま、ポカンとポトロスを見ている。法男もケインに便乗して座ったままポトロスに一礼した。

ポトロスはその法男に頷き返し、ミレーニュに言う。

「いや、ミレーニユ殿、お構いなく。あなたはこの国の大切なお客様だ。私に対しての礼は無用」

そうは言われてましても、と椅子を引き、ポトロスに着座してもらう。そして、お茶を入れますね、と隣の部屋に消えた。残るターニヤとアトロスは座らずポトロスの後ろに立つ。このテーブルは四人掛けだった。

その時、ケインはすばやくさつきまでミレーニユが座っていた席に移動し、法男の肘をつつく。

「うん？」

（お、おい、この人陛下って……もしかしてこの国の王様？）

ひそひそ声で法男に尋ねる。

「うむ。このサラティア王国の君主、ポトロス王だ」

（げ、なんでそんなえらい人がこんなところに？）

「さあ？しかしここはサラティア城の一室。同じ屋根の下に住むポトロス王がここに来てもおかしくないかもしれない」

（そういう問題かよ！）

目の前で交わされる内緒話にポトロスは苦笑する。後ろに立つアトロスの顔からも深刻な色は消えていった。ターニヤはうつむき、居心地悪そうにしていた。

「おほん」

ポトロスがわざとらしい咳払いをするとケインはさっと黙り、背筋を伸ばした。

「初めましてウエスト殿。私はこの国の王であり、あなたをここに呼び寄せたこのターニヤの父親です」

「え？ターニヤって王女様なの？」

思わずケインは後ろでうつむいてるターニヤに声を掛けてしまう。ターニヤは声を出す事無く小さく何度も頷いて見せる。

「話を続けても良いかな？」

すでにポトロスは王の顔から柔和な普通の人の顔になっていた。「は、はいっ、すいません！」

さつと背筋を伸ばすケイン。

「いや、あなたもミレーニュ殿と同じくこの国の民ではない。私にそういったかしこまった態度を取る必要は無いよ」

ポトロスは微笑みながらケインに言う。

「はいっ。……あ、いや、お、おう、分かった」

ケインは喋り辛そうだ。

そこにティーカップを三つのせたお盆を持ってミレーニュが戻って来た。ミレーニュは一つ空いている席と立っている二人を見て困った顔になる。

「あ、あの、アトロス様、どうぞお座り下さい」

実は王位継承権はターニヤが第一位でアトロスはかなり下の方であつた。サラティアでは血とともに魔力の大きさが王を継ぐ条件となっていたのだ。しかし、この場では地位よりも個人が大切なようにミレーニュは感じ、アトロスを立てたのだつた。それに、よくこの部屋に訪ねてくるターニヤの事は友人に近い感情を持っていた。

「ミレーニュ殿、お気遣いありがとうございます。ですが、私達はお茶を飲みに来たものではありませんから」

どうぞお座り下さい、と空いた席を手の平を上に向けて指し示す。

「でも……」

なおも躊躇うミレーニュにポトロスも声を掛ける。

「そのお茶はそちらのお二人に。さ、さ、どうぞどうぞ」

ポトロスにこうまで言われては仕方ない。ミレーニュは諦めて席に着く。

まともな人が出席し、踊り続けた会議もようやく進み出す。

かがり火。

「魔方阵がまたしても発動したようだ」

暗い洞窟を照らす。

「……魔神が？」

巨大な影。

「いや、その気配は無い」

細身の影。

「なら、また失敗か」

見た目はゴブリン。しかしその大きさは通常のゴブリンの五倍はあつたであろう。

「しかし、先の失敗ではジャイアントを屠る男を出現させている」

ほっそりとした身体に尖った耳。エルフ。闇色に染まったエルフ。

「ならば次はジャイアント三体だ」

「大丈夫か？連戦は必要無いとはいえさすがに三体はきついんじゃないのか？」

「誰にものを言っている？」

闇色のエルフは笑う。

「失言だった。お前は神になる存在だったなメドーシュ」

ゴブリンキングは立つ。

「行くぞアーメス。貴様こそ術を失敗させないよう心しろ」

ゆらり、何も無い所で影が揺れた。

「過去、魔神以外の存在を召喚した例を記述した物はありません」

進んだ会議はすぐ壁にぶち当たる。

「魔神が元の世界に戻る様子を詳細に書いた文献も残っていません」

あの人が召喚した魔神もいつの間にか消えていた。……あの人と共に。

ふつ、とミレーニユの目が遠くなっていく。

「ふうむ……」

ポトロスの顔が渋くなる。

ケインは自分の事が話し合われているというのは分かっている、

話の内容が分からないので他人事のような気分で適当に頷いている。
「召喚、という魔法を詳しく調べ研究し、帰す為の術を新しく考案するしかない、か……」

ポトロスはしばらく沈黙し、考えをまとめる。

「ミレーニユ殿、申し訳ないがあなたにその役を頼めないだろうか」
ミレーニユはおだやかに一礼する。

「結果をお約束する事は出来ませんが全力を尽くしましょう」

「ターニヤ、お前はその手伝いを」

「は、はい！」

「アトロス、ウエスト殿がこちらでの生活に困らぬよう手配を」

「はっ」

「ノリオ殿、あなたはウエスト殿と立場を同じくする者。ウエスト殿の力になって頂きたい」

「承知した」

え？ こいつが？ と、ケインは不満そうな顔を見せるがポトロスの言葉に口答えなんて出来る訳がない。

かくして、会議は閉幕する。

「よう、人がせつかく作った渾身の一振りを真つ二つにした魔神さん。まさか、たった三日後に全く同じ剣を作らされるとは思いませんでした」

「儲かったな」

「毎度……じゃねえよ！俺は商売人じゃなくて職人だ！」

「ふむ。代金を預かって来ているのだから必要なかったか」

「毎度」

法男はブランの店を訪れていた。

「うお！丸！」

小さな少年を連れて。

「ん？なんだそのガキは？」

「ガキじゃねえ！俺様は……」

かつて聞いた台詞が並ぶ。法男は聞いた事があるやりとりを聞き流した後、ブランに代金を支払った。

「毎度」。お得意さんになったお前にプレゼントをやるう」

ブランは手の平サイズの丸っこい金属プレートに皮のベルトを取り付けた物を法男に渡す。

「これは？」

「胸当てだ。お前、結局動き辛いつてわがままな理由で鎧を着けない事にしたらしいじゃねえか。せめてそれで心臓を守るぐらいはしとけ。気休め程度のお守りぐらいな物だがよ」

ブランはちよつと照れくさかったのかもしれない。

「ありがとう。次の戦いが終わったら、この胸当てのおかげで命が救われたと礼に来る事を約束しよう」

「てめえは未来を予知でも出来るのかよ！」

「適當過ぎるだろ！」

笑いながらそう言つて法男を叩いたブランはじいっと法男の顔を覗き込んだ。

「お前、えらいノリが良くなつたな。一回死んで人が変わったか？」

「いや？変わつてないと思うが？」

「ふむ」

ブランは法男を見つめ、それからその隣のケインを見る。

「な、なんだよ？」

「いいや、別に」

ブランもケインを見る目が変わったようだった。

「お前にも何か作つてやろうか」

「はあ？俺はW・Hウォー・ホース乗りだつて言つてるだろ！エクリオス以外必要ねえ！」

「そのW・Hとやらがよく分からねえんだが」

ブランは首を捻る。

「ケインと共に召喚された武器だ。俺の十倍ぐらいの大きさで、召喚された部屋から出せないでいる」

法男が横から口を挟む。ちなみに、二メートル六センチの法男に対し、エクリオスは約十五メートルであった。

「ほう、ヨシオカの十倍の大きさの武器……。見てみてえが部屋から出せないんじゃないやあな。まさか壁をブチ破るわけにもいかなえし」

「お、その手があったか」

ケインはぼんつと手を打つ。

「やめとけやめとけ。お前そんな事をしたらミレーニユに殺されるぞ」

「うえ！？そ、そうなの？」

たじろぐケインにブランは大きく頷いて見せた。

「ああ。あの部屋をミレーニユはかなりの思い入れを持って大切にしてるからな」

「知り合いだったか」

「何！お前、ミレーニユさんとどういう関係だよ！」

「んー？気になるのか？」

ブランはニヤニヤとケインの顔を覗き込む。

「もちろん！」

ケインはぐぐつとブランに迫る。

「なあに、ただの昔の旅の仲間だよ」

ブランはニヤリ、ケインの肩を叩く。

「よし！」

「それにいい事を教えてやろう。あいつな、今、付き合っている恋人はいねえ」

「おお！」

ケインの目が輝く。

「エルフに年の差なんて言葉は存在しない」

「うんうん」

「お前みたいないい男なら頑張れば手が届くんじゃないか？」

「おう！ノリオ、俺は用事を思い出したから先に帰る。じゃあな」
シュツと手をかざしケインは店を出て行った。

法男はケインを見送るブランを見る。その目には子供をからかっているだけのものではない、真剣な気持ちも混じっているような気がした。

法男がミレーニユの部屋を訪れた時、ミレーニユとターニヤは分厚い本を難しい顔で読みふけており、ケインは床に寝っ転がってお絵描きをして遊んでいた。

法男に気がついたミレーニユは立ち上がろうとするが、法男はそれを制した。

「悪いが、俺も勝手に寛がせてもらってもいいか？」

ミレーニユはちらりとケインを見て微笑み、頷く。ミレーニユが再び本に向かうのを確認し、法男は本棚に向かった。その中の一冊を抜き出し、開く。

読めない文字で埋まっている。

パラパラとめくる。

挿絵があるページがあった。奇怪で不思議な見慣れない絵。文字を読めなくても挿絵を眺めるのは楽しかった。法男はパラパラ、パラパラと挿絵を探しながらページをめくっていく。

（お、おい、お前、この文字が読めるのかよ）

いつの間にか隣に来ていたケインがひそひそ声で話し掛けてきた。

（いいや。絵を眺めていた）

（なんだよ、びっくりさせるなよ）

（お前も読めないのか）

（当たり前だろ？違う世界にいたんだ。読めなくて当然）

馬鹿な訳じゃないぜ？ と、ケインはあごを上げる。

（ふむ）

そんなケインを見つめ、法男は考えに沈む。

（おい、どうかしたか？）

（いや、それにしても言葉が通じるのは不思議だな、と）

（あっ……あゝ、ほら、俺って天才だろ？聞いた瞬間言葉を理解して無意識のうちにこっちの言葉を喋っていたんだよ、うん）

（なるほど、お前についてはそうなのかもしれない）

（だろ？）

（だが、俺の頭の方はあまり……）

法男は学校での成績を思い出していた。それはとても残念なものだった。

（なるほど、不思議だな）

ケインはとてもいい笑顔になった。

「ターニヤ様、これを……」

緊張をはらんだミレーニユの声が聞こえ、法男とケインはそちらを向く。

そこにはミレーニユに差し出された本をターニヤが見つめている姿があった。読み進めるうちに、みるみるターニヤの表情は険しくなっていく。

法男とケインは静かに歩み寄り、そつとターニヤの読んでいる本を覗き込んだ。挿絵が見えた。奇怪な文字が十字を作っている。

法男には見覚えがあった。

魔物達の額に浮かんでいたあの模様。

「その本によると……」

法男達に気がついたミレーニユが説明してくれる。

デビル・スタンラ
悪魔の刻印。

そう呼ばれていた太古の術だという。その術を受けた者は術者の言うがままになり、魔法を一切受け付けない身体になる。術は受け

る者の額に手を当て、術者の内にある魔を直接注ぎ込むというものだった。

魔。

魔法とは全く異なる物。その魔を注ぎ込まれる者は発狂するほどの苦痛を感じるといふ。受ける者に非常な苦痛を与える非道な術。それは今では存在しないはずの「悪魔」と呼ばれた種族にしか使えない術であった。

「ふむ。敵は悪魔か」

法男の言葉にターニヤが青ざめる。

「そ、そんなはずは……。悪魔なんて伝承にしか残ってない、今では存在しない種族なんだし……」

「俺達はその伝承にすら載ってない存在なのだろう？だが、こうして確かに存在している。なあ、ケイン」

「え？うん、そうだね」

ケインは本に書かれていたのが自分の帰還とは関わりが無い、よく分からない話だったので既に興味を失っていた。

その夜。

トントン、ノックの音がした時、法男はテーブルを窓際に移動させて月を見ていた。

「どうぞ」

入って来たのはケインだった。心なしか元気が無いように見える。

「どうした？眠れないのか」

「うーん……そんなとこかな」

ケインもテーブルの向かい側に座り、窓の外を見る。

まあいいお月様。

ケインは頬杖を突いて月を眺める。

「なあ」

「うむ」

法男も視線を月に戻す。

「ここ、俺が住んでいた世界とは違う世界なんだよな」

「うむ。実は俺はこの世界の事はあまり知らず、お前の世界の事は全く知らない。もしかしたら俺の思い違いだったかもしれない」

「いやあ、悪い。俺の世界の世界地図にはこんな国も召喚も魔神もいない。違う世界なの間違いなんだ。でもな、」

「うむ」

二人は同じものを見ていた。

「月は同じなんだ」

「うん」

「不思議だな」

「ああ。文字は読めなく言葉が通じるのも、お前がお前だけでなくエクリオスと一緒に召喚されたのも」

「そうか、それもそうだな……」

「ケイン、お前は寝ている間に召喚されたんだよな」

「ああ、そうだったな」

「俺は起きていた」

「覚えてるんだ？ 召喚された瞬間の事」

「うむ。俺はその時、座っていた」

二年F組の教室で。

朝のH・Rが始まる前の時間に。

「うん」

「ふつと変な感覚に襲われたと思った次の瞬間俺はこの世界で立っていた」

「うーん……。よく分かんねえな」

法男の方を向くケインの口元に笑みが浮かんできた。それはどんな笑みだったのだろう。

「うむ。俺にはこう感じられた。あまりにも都合が良過ぎる、と」

「うん、まあ、そうかな」

法男もケインの方を向いた。

「なあ、ケイン、俺達は本当にこの世界に来ているのだろうか」

「え？どういう意味？」

「うーん……。よく分からんが……」

「分からねえのかよ！」

「そうだな、帰る方法なんだが……例えば……」

ケインは再び真面目な顔になる。

「例えば？」

「死ねば元の世界に帰れる、とか、」

「なるほど。よし、ノリオ、試してみる。そして、本当に帰れたかどうか教えてくれ」

「うむ、断る」

「けち」

ケインは笑っている。

法男も口元が緩む。ケインがいつものケインだったから。

二・終

トントン。

その時、ミレーニュとターニャは分厚い本に向かい、ケインと法男はサラティアのカードゲームに興じていた。

部屋を訪れたのは一人の兵士。

「ノリ才殿、お支度を」

法男は頷き、立ち上がる。

「ケイン、悪いが中座させてもらっ

「お？おつ。じゃあ、続きは後でな」

ケインのその言葉は法男の動きを一瞬止めた。

「ああ、また後で」

笑みを浮かべて答える事が出来た。

その逡巡の意味を理解するターニャは立ち上がり、出て行く大きな背中に言葉を掛けようとした。

言葉は、出ない。

「ミレーニュ……」

「はい」

すでに泣きそうになっているターニャにミレーニュは優しく頷いて見せた。

ターニャも部屋を出る。

「お、おい、どうしたんだよ！」

訳が分からないケインもターニャを追いかけて部屋を出た。早足で行くターニャにすぐに追いつき並んで歩く。

「おい、ターニャ、何があっただんだよ」

「戦いが始まるの」

「え？あー……」

ケインは自分がこの世界に呼ばれた理由を思い出した。

「な、なんだよあれ……」

ターニャとケインは物見台に並んで立っていた。

「ジャイアントが……三体も……」

一回ごとに強力になっていった敵。予想は出来ていた。

「ジャイアント？あの、でかいのか？」

「うん……」

しかし、実際に見てしまうと絶望感に押しつぶされそうになってしまう。

「あんなバケモノ、人間じゃ勝てねえだろ……」

「うん……前の時ね、ジャイアントが一体でね、ノリオが倒してくれたの。でも、その時、ノリオも死ぬぐらいの怪我をしてね……」

涙声になってしまう。ターニャは服の裾をぎゅっと握り、涙がこぼれ落ちそうになるのを必死でこらえた。

「ノリオは……ノリオは絶対に逃げたりしないから……でも……だから……今度こそ……」

それでも涙はこぼれてしまう。

「お願い！私には戦う力が無いから！でも、あなたには！」

必死で声を張り上げケインを見つめる。

いや、見つめようとした。

そこにケインの姿は無かった。

階段を駆け下り、廊下を走り、駆け下り、走る。ミレーニユの部屋の前を通り過ぎ、魔方陣の部屋の扉を開ける。

エクリオスの足元まで来ると息を切らしながら見上げる。法男がかつて登ったルートが見えた。教えられてはいたけど一度も使った事がないルート。落ちたら怪我ではすまないその道を、迷わず登り出した。

急げ、急げ、急げ。

コックピットにたどり着いた時にはもうへとへとになってしまっていた。それでも一息つく事なく起動させた。

ウーン……。静かなモーター音が部屋に響く。エクリオスは壁に向かって歩き出す。

「ケイン！」

ケインはビクとする。エクリオスの足が止まる。後部を映すモニターにはミレーニユの姿。ブランの言葉が蘇る。

今から自分が壊そうとしているものを大切にしている人がいる。

泣きそうな顔になってしまう。

悩む。

考える。

歯を食いしばる。

エクリオスは再び歩み出す。その背に再びミレーニユの叫びが投げ掛けられた。

「そっちはすぐに城壁になってるから！あっち！あっちなら庭になつて門の方に出られるから！」

ケインはエクリオスの上体を回転させ、直接ミレーニユを見た。

指差す姿が心に響く。ハッチを開けた。

「ありがとう！ミレーニユさん！」

微笑み頷く姿はケインに勇気をとます。

エクリオスは向きを変え、前傾姿勢になった。タイヤが回る。一気に加速する。腕の外側を前に突き出す。壁が近づく。激しい衝撃。

エクリオスは飛び出した。

近づいてくる三つの巨大な影。だが、戦う前から諦める者はいなかった。

「俺が三体とも相手しよう」

陣の先頭。ノリオとアトロス。

「だが、さすがに三体は……」

「任せろ。この前のような無様な真似は決して見せない」

「ヨシオカ……分かった。だが、我々も出来る限りの手伝いはさせてもらう。皆、いいな！」

応！親衛隊も力強く拳を突き上げる。

法男も頷き拳を握りしめる。

覚悟は決まった。必ず勝ってみせる。絶対に守り抜いてみせる。影が近づき、その巨大な姿を見せつけてくる。

法男は剣を抜く。駆け出そうとした時、サラティア軍の後方からざわめきが聞こえてきた。

アトロスは振り返る。見えたのは開きつつある城門であった。

「おい！何をしている！」

アトロスは叫ぶが城門は止まらない。

そして、姿を現した。

一步、また一步。

サラティア軍はエクリオスを呆然と眺める。襲撃してきた魔物達も、また。

法男は足が止まったジャイアント達を見据えつつ、背中から伝わってくる地響きを感じていた。

「おい、道を空けてくれ！」

スピーカー音が戦場に響く。エクリオスの前方に位置していた兵士達は慌てて移動する。道が出来た。道の向こうに小さなちよんま

げの背中が見えた。

ケインはニヤリと笑う。

エクリオスは前傾になり、動き出す。左腕を上げた。銃身が光る。狙いは一番前のジャイアント。発射。連射された弾丸はジャイアントの顔面を貫いていく。崩れる巨体。

エクリオスはちょんまげの横を通り過ぎる。

「ノリオ、おとなしくそこで俺様の勇姿に見とれてな！」

法男は笑い、自分を追い越していった背中に頷いた。

すでにエクリオスは次のジャイアントの懷に飛び込んでいた。鳩尾目がけて右腕を突き出す。当たる瞬間、拳だけが加速した。ジャイアントの体にめりこむ右拳。次の瞬間には元の位置に戻る。そして、また加速して伸びる。

何度も繰り返される衝撃はジャイアントの体を変形させていく。

そして、倒れた。

次だ。ケインはモニターに視線を移す。そこにどアップのジャイアントの顔が映っていた。

「しまった！」

ケインはエクリオスを反転させる。が、遅い。迫ってきていたジャイアントに組み付かれてしまう。組み合うエクリオスとジャイアント。

ケインの得意とする戦法はヒット・アンド・アウェイであり、と組み合わせは苦手であった。とっさに切り抜ける戦法を思いつけず、パワーを上げて押し切るしかない。だが、ジャイアントの筋力はエクリオスのパワーに負けていないようだった。

タコメーターはレッドゾーンに入る。エクリオスの腕から軋む音が聞こえる。ケインは焦った。

その時、背中の方からカッーン、カッーンという音が聞こえてきた。

「な、なんだ？」

思わず出てしまった声とは裏腹に、何が起きているのかケイン

には分かっているような気がしていた。次に見えてくるであろう光景も。

カッーン、その音がすぐ横で聞こえたかと思うとケインの目に空飛ぶちょんまげの姿が飛び込んできた。

法男は前回の戦いで剣を折られた事を恥じていた。

確かにジャイアントの体は硬かったかもしれない。しかし、ブランの剣は最高の剣である。折れた原因は己の未熟な腕。

もつと速く。

もつと強く。

もつと正確に。

ノリオは剣を振り下ろした。

消えていく圧力。崩れ落ちていく巨体。ケインは目の前で起こった光景に放心してしまう。

「すげえ……」

地面を転がり、起き上がったちょんまげは振り返り、ケインの方を見た。ニヤリ、とケインに親指を突き出してみせる。

「ちつ、やってくれるじゃねえか」

ケインも笑い、ハッチを開ける。

「おい、ノリオ、いい所持っていったっていい気になってんじゃねえぞ！これから俺様がもつと活躍してくるから！お前は休んでな！」

法男は笑って頷く。

ゴブリンとオーク達の災難が始まる。

「魔神……」

「魔神……か？」

「ヨシオカが連れていた子供だよな……？」

兵士達は呆然と魔物の群れを跳ね飛ばしていくあまりにも異質な姿を眺めるしかなかった。

「ヨシオカ、あれは……」

アトロスが法男に近づいてきて声を掛ける。

「うむ。ケインだ」

「あ、ああ。いや、あれは……」

「うむ」

アトロスすら目の前の光景を飲み込めないでいる。法男は説明する良い言葉が思いつかないので力強く頷くだけだった。

「おお、おお、すげえな、ありや。あれがケインが言っていたW・Hか。うつひょー！すっげえー！」

街を通って行く異様な巨人に驚いた街の人々も城門近くに集まり外で起こっている事を見つめていた。

「ブラン……」

はしやぎ、ご機嫌な様子のドワーフに話し掛ける美しいエルフ。

ブランは振り向くと眩しそうな表情になった。

「久しぶりだな、ミレーニユ。元気してたか」

「相変わらずよ、ブラン。エルフは変わらない。あなたはちょっと老けたかしら」

「そうか？まだまだ若い者には負けねえぜ？ターニヤちゃんが招待したあいづらにだってな」

ブランは城門の外を指差す。

ミレーニユの顔が憂れいを帯びる。

「魔神召喚は……成功しなかった。あの人が残した魔方阵はあの人以上には使う事が出来ないのかしら……。それとも、長い年月がその輝きを衰えさせたのかしら……」

遠い目になるミレーニユをブランは暖かい目で見つめる。

「何言つてんだ？ミレーニユ。お前は相変わらず馬鹿だなあ。エルフは本当に変われねえんだな」

がっはっは。

「え？」

ミレーニユはきょとん、とブランを見つめる。

「見ろよ、ミレーニユ。あの魔神なんかよりすげえ連中が現れたじやねえか。ターニヤちゃんレヴィよりもすげえ魔法使いだったっただけの事だよ」

「え……」

ミレーニユは門の外を見る。

そして、微笑んだ。

「そうね、ブラン。きっとあなたの言う通りね……」

間違いないえさ。こうしてお前をあっさり外に連れ出す程すげえ連中なんだぜ？

「さて、そろそろ戦いは終わりそうだ。俺は奴らを迎えに行くとしよう。あれを近くで見たいしな。ミレーニユ、お前も行かねえか？」

あつと言つ間に壊走していく魔物達。戦場にはもう敵影は無い。

「……」

ケインはコンソールパネルを操作する。エクリオスの背中、リュックの上あたりが開き、何かを発射した。

「ケイン！」

法男が呼びかけてくる。ケインはハッチを開いた。

「ケイン、お前の勇姿はしっかりとこの目で見届けた。さあ、帰ろ

う」

ケインは法男の言葉を聞きながら操作を続ける。

「ああ。先に帰つていてくれ。俺にはまだやる事が残っているから」
「ん？」

動かないエクリオスに疑問を感じ、法男はエクリオスを登っていった。既に慣れた通路である。

「何をやってるんだ？」

法男はケインが見ているモニターを覗き込んだ。そこには上空から映しだされているらしい、数体のゴブリンの姿があった。

ケインはコックピットに突然現れた法男の姿にも動じる事無くモニターを見つめ、手を動かしていた。

「ああ、偵察用の小型ヘリを飛ばした」

「ふむ？」

「敵の本拠地を突き止めるのは戦いの基本だろ？」

「なるほど」

法男は理解した。

「俺はここでこのまま操縦しなきゃいけないから。先に帰って皆に説明しといてくれ」

「分かった」

降りようとする法男に声が降ってくる。

「それとな、ミレーニユさんに謝っておいてくれ」
「うむ？」

それで声は途絶えた。降りながら法男はケインと共に聞いたブランの言葉を思い出していた。
なるほど。

遠くからこちらに近づいて来るプランとミレーニユの姿が見えた。
うむ。事情は説明しておこう。

しかし、ミレーニユに謝るのはお前がすべき事だな、ケイン。

お前がミレニーに怒られるところはとても見てみたいからな。

最終話 コール・ゴッド

あの山の向こう。裂け目みたいな洞窟。詳しい座標はエクリオスに記録されてるぜ。

会議の結論は明らかだった。しかし、それを言い出す者は限られていた。賛成という意志すらほとんどの者が示す事が出来ないでいる。

「じゃあ、俺行ってくるから」

「ま、待て。一人でか？」

「いかつい顔が慌てて言った。欲しい発言があったからだ。」

「うん」

「いや、俺も行こう」

「えー？俺一人で十分だって」

「洞窟だったな？エクリオスが入れない場所があればどうする？」

「うつ……」

ケインが返しを見つける前に法男は言葉を続ける。

「決まりだな。俺とケインで敵本陣を攻める」

「私も行こう」

アトロスも発言してみた。

「うむ。確かにアトロス殿はとても優秀な剣士だ。しかし、あなたはただの剣ではない。ここに残り、サラティアを支えるべきだろう」満場一致で却下された。

エクリオスの威力を目の当たりにした者はこういう意見を持つか

もしれない。

「あ、あの、ウエスト様の乗り物を倒せる魔物などなかないないでしょう。攻めず、守る方が安全なのでは……」

発言した者も分かっていた。しかし、選択肢を消す、という手順を必要だと感じたのだ。

「それでは戦いは終わらない。いや、あの乗り物が壊れでもしたらそれで我々の敗北となるだろう」

一礼して引き下がる。役割を終えて。

サラティアの運命を決断し決定するのはただ一人。
ポトロスが口を開く。

ミレーニユの部屋にいつもの顔が並んでいた。

「敵襲の間隔がだんだん長くなってきて、敵がだんだん強くなってきているのはあの術をやってるからじゃないかな……」

ターニヤが難しい顔で言う。

デビル・スタン

悪魔の刻印。その言葉を出す事すら忌避してしまう古の術。

「ふむ。つまり、早ければ早い程敵の戦力が整っていない、と」

「うん……。そう、だと思う……」

ターニヤは自分の考えに自信が無い訳ではなかった。そこから導き出される

結論が怖かったのだ。

「じゃ、明日出発だな」

「うむ」

ターニヤもうつむいて頷くしかない。

「ヨシオ力様、ケイン、気をつけて下さいね。決して無理はしないように。危ないと思ったらすぐに引き返すんですよ」

ミレーニユは心配そうな表情で言う。

「む」

「うん、分かったよ、ミレーニユさん。絶対無理はしないって誓うよ」

法男は応とも否とも言い難い微妙な返事をし、ケインはにこにこと頷く。

「そうね、ケイン、そうしてね。ヨシオ力様もですよ？」

「む」

「危ない時には引くんですよ？」

「む」

「無茶しちゃ駄目ですよ？」

「む」

「むー」

ミレーニユは口を尖らせる。

「大丈夫だよ、ミレーニユさん。僕がついてるからさ。敵の親玉をさつさと見つけてさつさとやつつけちゃうからさ。法男なんて見るだけだよ」

あれ？ ミレーニユはケインを見る。

「……ケイン？無茶はやめてって話をしてるのよ？」

「うん、分かった。無茶はしない。俺とエクリオスは無敵なんだぜ？」

にこにこ答えるケインにミレーニユは不安そうになる。

「ケイン、えーと……、何て言ったらいいのかしら……」

「うん！任せて！」

ぐつと拳を握りしめるケイン。言葉を失うミレーニユ。

勝者、ケイン。

まんまとミレーニユの追求を逃れた法男。

ふさぎ込んでいるターニヤ。

そして、ノックの音が。

「ポトロス陛下が皆様とお食事を一緒に、との事です」
アラミアだった。すでにケインとも面識がある。ケインが生活する為のあれこれはアラミアが面倒をみていた。

「お、ご飯」

ケインは食事の言葉にのみ反応し、すでにご機嫌になっている。
「悪いが俺は辞退させてもらおう」

法男の拒絶にもアラミアは動じない。予想していた反応だったのだ。

「ノリオ様が兵舎で取られていた量は軽くご用意出来ますよ？」

「お招きに預かるう」

法男は立ち上がる。

「じゃあね。食べ終わって時間があるようならまた、」

ミレーニユの言葉はケインに遮られた。

「じゃ、行こうミレーニユさん」

「いえ、私は……」

「あれ？アラミアさん、みんな、だよな？」

アラミアは微笑み、頷く。アラミアとケインの仲は良好だった。

「はい。ケイン様。もちろんミレーニユ様も招待されてますよ」

「あ、あの、私は……」

「だってさ、さ、行こう」

なんと、ケインはミレーニユの手を取り歩き出した。引っ張られ歩き出すミレーニユ。なんと、その顔には照れたような笑みが浮かんでいるではないか。

残る三人も部屋を出る。

アラミアは前に行く二人を見て笑顔になる。そして、前を見たまま隣を歩く法男に話し掛けた。

「微笑ましいですね」

「うむ」

「……ノリオ様、私達も手をつなぎましょうか」

「いや」

間髪入れずに答える法男。

「私とじゃ、お嫌でしたか？」

「いいや。俺はケインのような子供ではないのだな」

その答えを聞いてアラミアはくすくすと笑う。

「どうした？」

「ノリオ様、手と手を繋ぐのは子供だけがする事とは限らないんですよ？」

「……う……む」

言葉を詰まらせる法男を見てアラミアはまたくすくす笑う。

そんな二人を少し離れて見ていた最後尾のターニヤは顔を曇らせていたのだった。

ポトロス、アトロスが迎える。礼は無用。皆、それぞれ席に着く。豪華な食事が次々と運ばれて来る。ポトロスが短い祈りを唱え、最後の晚餐が始まった。

「ヨシオカ、いつ出発するのか決めたのか」

アトロスが問う。

「うむ、明日だ」

法男の後ろにはワゴンが用意されており、法男の前の皿が無くなるはしから追加されていく。ワゴンの後ろにはワゴンが用意されており、ワゴンが空になり次第交換されていく。

「明日か……。急だな。準備とか大丈夫なのか？」

「その事なんだが、頼みがある。ケインの話によるとエクリオスで半日はかかるそうだ。少し、食べる物と飲み物を用意して頂けるとありがたい」

「分かった。が、少し、でいいのか？」

アトロスは笑う。その目は次々と追加されていく皿を見ていた。

「うむ、言い直そう。出来れば持てるだけ頼みたい」

笑い声が部屋を包む。ポトロスも愉快そうに笑っていた。その視線はケインに移る。笑い、元気に食べている姿に胸を刺される。

「君達には本当に申し訳ない事を頼んでしまったと思っている」

ポトロスの言葉に皆は静まり、注目する。

「気にすんなって」

ケインは陽気に声を掛ける。食事と気楽な雰囲気はポトロス相手でも緊張はせずにすんでいた。

「だが、この国の者ではない、この世界とは違う世界から来ているあなた達に一番危険な役割を負わせてしまった。この国の長として心から詫びを申し上げる」

ポトロスは頭を下げる。

「うむ」

「ああ、任せとけ」

二人は力強く頷いた。

ポトロスは法男とケインの表情を見てふつと安心したように息を吐く。

「ありがとう、二人とも。しかし、そうは言ってもウエスト殿のような幼き者に危険な場所へ行つて頂くというのは心が痛むのだよ。くれぐれも自分の身を第一に、な」

ケインはもう、話に飽きて料理に手を伸ばしていた。

「確かに俺は子供だけどさ、」

え？ うん？ あら？ 三人が動きを止め、ケインを見つめる。もぐもぐさせていた。

「でも、俺は保安官だから」
もぐもぐ。

「とつくに覚悟は決めている」
ごつくん。

「戦えない者の前に立って戦うのは俺の仕事だから気にすんなって。それに俺の事ばかりだけど、ノリオだって俺と三つしか変わらないんだぜ？」

「ええ！」

「なんと」

「ヨシオ力……」

ケインの言葉は三人を絶句させた。

低い唸り声。

「ほう。本当にいたか」

「見つけた者には後で褒美をやらんとな」

凶悪な目が二人を睨みつけている。黒い鱗が不気味な光を放っている。巨大な翼は広げれば二十メートルにはなるだろう。

「従わせる事が出来れば城壁は無いも同然」

「異界の助っ人も飛び越えてしまえばいい。が、それはお前がこいつをねじ伏せられたら、の話だが」

「ふん、やってみせるさ。こいつを倒せば俺は神になれる。これが俺の最後の戦いだ」

ゴブリンキング、メドーシュはワイバーンに向かって突っ込んでいった。

闇色のエルフはその背を静かに見つめる。

エクリオスは城門の横に置かれていた。そのボディは折り畳まれており、コックピットは地面近くにあった。

「気をつけてな」

見送りはターニャ、ミレーニュ、ブラン、アトロス。

「持てるか？」

アトロスは大きなリュックを法男に渡す。見つめるターニャ。その仲にはターニャが作った料理も入っていた。

「ありがとう」

受け取る法男。ケインはハッチを開け、エクリオスに乗り込む。起動させ、立ち上がっていくエクリオス。直立しても動きは止まら

ず、今度は仰向けに折りたたまれていく。手をついた、と思うとその手首から車輪が現れた。

「おお！こりゃあ、見事だ！」

ブランははしゃぐ。ミレーニユは浮わついた気分になれないように、じつと見つめていた。

「ノリオ！乗れよ！」

法男は苦もなく登ると、コックピットの横、肩辺りにちょうどいい場所を見つけ座り込む。

「じゃあな！ちよつと行ってくる！」

手を上げるケイン。法男も手を振る。

「死ぬなよ！」

「武運を！」

「気をつけてね！絶対に帰ってきてきてね！」

ミレーニユの声にケインは答える。

「ああ、約束するぜ！」

エクリオスは快調に走る。

流れる風景。葉を繁らせた木々。元の世界でも見たような、初めて見るような。時折、小動物も顔を覗かせる。狸っぽいものやら狐っぽいもの。自然の美しさは少年達の心を惹きつける。

「のどかだな」

「うむ」

「この世界も……」

ケインの言葉はそこで途切れた。法男はケインを見る。遠い目をしていた。

自分を見ている法男に気がつくケイン。真面目な顔で頷いた。

「ああ、分かった、法男」

「うん？」

「メシにしよう」

法男も頷く。

エクリオスの上でリュックの中身が広げられる。

「ここからこっちは俺の分だからな。手を出すなよ」

和やかに昼食を取る二人。

「なあ、ノリオ。お前、元の世界じゃ何してたんだ？」

「学生……、学校は分かるか？」

「ああ、俺の世界にもあるからな。俺はもう、行っていないが」

「ふむ。保安官は大変だな」

「本当に大変なんだぜ……。任務が終わっても訓練、トレーニング、遊び……。勉強と寝る時間なんて無いぐらいだぜ」

「なるほど」

ノリオは微笑む。

「だが、こっちに来てからはのんびり出来ているようだな」

「ああ」

ケインも笑う。が、ふっと表情が消え、ぼうつとして呟く。

「こっちの世界にも学校はあるのかな……」

昼食も終え、エクリオスは再び進み出す。タイヤで進めない場所では手足で登り、障害がある時には直立して壊しながら進む。

そして、エクリオスは歩みを止めた。

目に写るのは裂け目のような洞窟。

法男とケインは顔を見合わせた。

「ノリオ、覚悟はいいか？」

「うむ」

「よし、行くぞ！」

「いや待て」

エクリオスを進ませようとしたケインをノリオは制する。

「なんだよ、いったい」

ケインは不服そうだ。

「ミレーニユに言われた事を忘れたのか？ここは慎重にいこう
はっとするケイン。」

「分かった。何か作戦はあるか？」

「……………なるべく見つからないようにしよう」

「よし、分かった。で、どうやって侵入する？」

「……………あそこから、エクリオスで、なるべく静かに」

「決まりだな」

「うむ」

ケインは操縦桿を握り、声をひそめて法男に言う。

（行くぜ？ノリオ、静かにしてるよ？）

（うむ）

（よし、発進！）

ズシーン、ズシーン。

終 - 2

洞窟の中はパニックになっていた。逃げ惑う大小様々なゴブリン達。オークやジャイアントの姿は無かった。

「作戦は失敗かもしれないな」

「うむ。作戦を若干変える必要があるそうだ」

「どうする？」

「親玉を探そう」

「よし。悪魔だったな」

ケインは周りをきよろきよろと見回す。広い空間が奥へと続いており、そこかしこに枝道が見える。枝道はエクリオスでは入れそうにない広さのことが多い。

「エクリオスで行けるとこまで行ってみるか」

「うむ」

ケインはライトを点けた。光が洞窟を照らす。

「行くぜ」

エクリオスは闇に向かって歩き出す。

「いやあ、見事な大穴だった」

「すごかったのよ？こう、ギューンって、バーンって」

ブランにお茶を出したミレーニユは、身振り手振りで説明する。

本を抱えたターニヤはそんなミレーニユを見てくすりと笑う。ターニヤがここにいるのはもちろん、ケイン達の帰還の手がかりになる物を探す為である。彼らが自分達の為に戦ってくれている。それ

ならば自分は彼らの為に出来る事を精一杯やろう。ターニヤはそう強く思っていた。

「それで思い出したがあの中の時の、ケインがミレーニユに謝ってる姿ときたら本当に……」

くつくくつとブランは笑った。

「ちよつと、ブラン？あなたのせいでしょ。ひどいじゃない、子供を騙すなんて」

「いやあ、俺は本当にそう思ってた、親切に忠告したつもりだったんだがなあ」

「違うわよ。私が大切にしてるのはあの部屋じゃなくて……」

ミレーニユの言葉はそこで途切れた。ブランも続きを促そうとはしない。

「魔方陣？」

ターニヤが口を挟んでしまった。

「え？え、ええ、まあ、そうね……」

ミレーニユは口ごもりながら、何故かブランを見た。

「四〇〇年前はあの魔方陣を使って魔神を召喚出来たんだよね……」
ブランもミレーニユを見た。

二人は思い出していた。あの戦いを。勝利に導いたあの男を。

狭くなっていく洞窟。

エクリオスが身を縮めだし、法男がそろそろ単独行かと思い始めた時、急に広い場所に出た。上から太陽の日差しが差し込む。見上げると天井が無かった。どうやら火口のような場所らしい。そして入って来た所以外に出口は無かった。

そこに、いた。

巨大な翼を持つ竜。それにもたれ掛かるように寝そべる巨大なゴブリン。少し離れて座り込んでいる真っ黒いエルフ。

その、三つの存在は眠りこけていた。

法男はケインを見る。頷くケイン。法男はエクリオスを降りていく。

地面に着いた時、闇色のエルフが目を覚ました。

彼は目に写る法男とエクリオスを認識し、ニタリと笑った。

「ほう……？お前らが異界の人間か。これはこれは」

「お前が悪魔か！？」

ケインが叫ぶ。アーメスは視線をコックピットに上げた。

「おや、そっちが本体か。違うよ、かわいい戦士さん。私はただのエルフだよ」

ケインの声に残りの二体も目を覚ました。メドーシュは大きく伸びをし、ワイバーンは大きな欠伸をした。

「うーん……良い朝だ」

「メドーシュ、もう昼を過ぎているようだ。お客さんも来ている」

「ほう？珍しい。何の用だ？」

メドーシュは二人を、エクリオスを見ても動じない。

「悪魔を探しているらしい」

「へえ……」

メドーシュは笑う。

「知っているのか！？」

再び問うケイン。

「……知っているんだろ、アーメス。どこにいるのか教えてやれよ」

「ふふ……、ここにいますよ」

「何！」

ケインはエクリオスの左腕を上げ、周りを見回す。もちろん、他には何者もない。

「騙したな！」

レイル・ガンの照準を笑っているアーメスに合わせた。

「聞きたい事がある」

それまで黙って成り行きを見つめていた法男が口を開く。

「……何だ？」

「そのこの魔物の額にある模様は誰が付けた？」

アーメスの目がすうつと細くなる。メドーシュがすうつと静かに息を吸う。

「……私だ」

抜刀した法男が一気に距離をつめる。アーメスに迫った法男にメドーシュの拳が唸りを上げて襲い掛かる。躲す法男。レイル・ガンが発射された。風が巻き起こる。ワイバーンが巨大な翼で二人を庇っていた。翼には傷一つついていなかった。

「君達は悪魔に用があるのだろうか？」

アーメスはまだ笑っていた。

「彼なら君達の後ろにいるのに」

「騙されないぞ！」

ケインが叫ぶと同時に背後から爆発音。モニターには唯一の出口が塞がっていく様子が映し出されていた。

「……ちいっ」

ちよっぴり焦ったケインはレイル・ガンを乱射した。アーメスとメドーシュは躲しながらワイバーンの背に乗る。近づこうとする法男をワイバーンの爪と尻尾が邪魔していた。

凄まじい風圧と共にワイバーンは浮かび上がる。

「お客様のお相手をしてあげたかったのだが、我々にはする事があるので失礼するよ」

「客人！まあ、そこでゆっくりしていつてくれ！」

上昇していくワイバーンにケインはレイル・ガンを発射するが撃ち落とす事は出来なかった。

「くそ！」

ケインは崩れた出口を見た。左腕を構える。

「法男！急いで追い掛けるぞ！」

頷く法男。レイル・ガンが発射された。

激しい音を立てて崩れていく周りの壁。出口はさらに固く閉ざさ

れてしまった。

地道な作業が続く。石を一つ一つ取り除いていく法男とエクリオス。

「あのエルフが悪魔だったのかな、黒かったし」

「お前の世界の悪魔は黒いのか」

「そうそう。黒くてつるつるピカピカしてる。ま、想像の中の世界だけだな」

「ふむ。俺の世界の悪魔も空想上の産物だな。蝙蝠のような羽があったり緑色をしていたり動物だったり。形はいろいろらしい」

「それなら僕はそっちの子の世界の悪魔に近いって事だね」

全身が総毛立つ。この世ならぬ邪悪。精神を凍らせる原初の恐怖が二人を襲う。

法男は振り向く。そこには朧な影が。背中を冷たい物がつつう。

ケインは後部のモニターを見た。何も写ってない。慎重にゆつくりとエクリオスを反転させる。そこにいるものを刺激したくなかのように。そして、その目に影が写しだされる。震える膝。

「ハッ！全然つるつるピカピカじゃねえじゃねえかよ！」

レイル・ガンをその影目がけて数発撃ち込んだ。影は消え、少し向こう側に再び現れる。

「ひどいな、いきなり撃つなんて。僕らはこの世界じゃない世界から召喚された仲間じゃないか」

「何！」

「あの、エルフにか」

ケインも法男も少しづつではあるが目の前の影に対する恐怖を克服しつつあった。

「そう。あの、アーメスに」

「それで契約したんだな」

ケインは照準を合わせつつ問う。

「いや。僕ら悪魔は契約なんてしないよ。彼が面白そうだったんで協力しただけさ」

影は愉快そうに揺らめく。

「……どういう事だ？」

「いやあ、傑作なんだよ。彼は僕を召喚しといて、こんな小物しか出せないなんて、とか言いながら落ち込んでるのさ。だったら僕の世界の王様を呼び出せばいいじゃないか、と。その為の力をあげたのさ。僕の『魔』をね」

「お、お前は小物なのか」

「そうだよ。悪魔の中でも小さな力しか持っていないか弱い存在だよ。しかも、アームスに僕の中の『魔』をほとんどあげてしまったから、ここにいる僕なんて残りかすみたいな物だよ」

ゆらり、ゆらり。

「だからね……」

影がはつきりしてくる。

「君達にも……」

真っ黒いサンショウウオが二本足で立っていた。

「僕を殺す事が出来るかもしれないね」

その体が膨らむ。顔の部分は他の所よりもさらに大きく膨張していく。瞬く間にエクリオスの倍ほどの大きさになった。巨大なオタマジャクシが二人を見下ろす。

法男はその足目がけて剣を叩きつけた。ゴムのような感触。衝撃は吸収され、剣を弾き返す。足が持ち上がる。法男は後ろに飛び退いた。

ケインはレイル・ガンを発射した。結果は法男と同じ。まったく効果が無かった。オタマジャクシの口が開いた。真っ赤な空間。そこから火の玉のような物が撃ち出されてくる。

「ちいっ！」

ケインは必死で避けようとする。しかし、エクリオスは前後の動

きは俊敏でも横移動はそこまで早くない。火の玉はエクリオスの肩をかすめてしまう。そして、撃ち出された火の玉は一発ではなかった。

エクリオスの膝を破壊した。腹を穿った。腕をもいだ。コックピットを貫いた。

叫ぶ暇もなかった。

見る影もない姿になってしまったエクリオス。ぐらり。

倒れるかと思ったエクリオスは薄れ消えてしまった。

法男は駆ける。エクリオスが、ケインがいたその場所に。

何も、無い。

「へえ？不思議な現象だね」

悪魔の声が聞こえる。

「君達はかなり遠い世界の人間だからかな」

ケインはもう、いない。

「知ってる？召喚ってね、世界と世界をつなぐトンネルを開けるような物なんだ。とっても大変だね、たいていは近い世界に小さいトンネルを開けるのが精々なんだよ。ここからは、魔神と呼ばれる連中がいる世界とか僕らの世界ぐらいが一番近いかな。それが、四〇年前は短いけど巨大な穴を。今回は本当に小さなわずかな穴だけど果てしなく長いトンネルを。多分、小さ過ぎて遠過ぎたんだろうね。だから、不完全な召喚になってしまったんだろう。よく分からないんだけど、もしかするとあの子は自分の世界に帰ったのかもしれないね」

ケインは自分の世界に無事に帰ったのだろうか。それなら。

泣く必要はないだろう。

悲しみを感じる必要はないだろう。

自分がやるべき事を果たすのみ。

「君も自分の世界に帰りなよ」

法男は飛んで避けた。自分が居た所に大穴が出来る。次々と飛んでくる火の玉。それを避けながら悪魔に近づいていく。

斬りつける。結果は変わらない。

落ちてくる巨大な足。避けると同時に剣を突き立てる。むなしく弾き返された。そこにもう片方の足が飛んでくる。法男は蹴り飛ばされ、壁に叩きつけられた。

激痛。うまく体を動かせない。真っ赤な口が開いていくのが見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6666x/>

サムライ・アタック

2011年11月24日22時49分発行